

★☆北区つかこうへい劇団 十二月公演

鬼く鷹大江山奇譚

作・演出 渡辺和徳

【上演期間】 二〇〇八年十二月三日～七日

【会場】 滝野川会館・大ホール（東京都北区・滝野川）

【上演時間】 約一時間半。

【時代】 現代。および千年前の平安時代末期を想定するが、明確な時代設定は行わない。

【場所】 現代の日本。および京都の平安京・大江山近辺を想定するが、実在の場所は明示しない。

【舞台】 黒のリノリウム敷きの素舞台。セットなどは特にないが、奥に一間幅の段が一段ある。

【衣裳】 都人は黒一色の洋装。大江山の民はカラフルな和装を基本とする。

ただし伊吹は黒を基調とした和洋半々、麻呂は伊吹と同じ衣裳で黒一色とする。

【登場人物】

■都人

伊吹 …… 二十年前、都と争った青い瞳を持つ鬼、カガチの一族の生き残り。幼いころに捕らえられ、朝廷に逆らう「鬼」を退治する刺客として育てられる。

信綱 …… 帝に仕える侍大将。心を寄せる伊吹の為、鬼退治を命じ続ける。

与平次 …… 伊吹の付き人。虎蔵の兄だが、出世を夢見て朝廷に降る。

保昌 …… 信綱配下の侍。

■大江山の民

弥三郎 …… 大江山に住む荒くれ者たちの頭領。大酒飲みで女好き。かつては都の侍大将として活躍したが、ある日を境に都に逆らう「鬼」となる。

呉葉 …… 大江山の荒くれ者たちの姐貴分。朝廷に親兄弟を殺された恨みを持つ。

虎蔵 …… 大江山の荒くれ者の一人。朝廷に村を焼かれ、大江山に逃げてきた。与平次の弟でもある。

熊蔵 …… 大江山の荒くれ者の一人。虎蔵とは、山に来る前からのつきあいである。

■その他

麻呂 …… 諸国を旅する呪い師。奔放な性格を装っているが、帝の意思を諸国に伝える隠密の役も担う。

音楽「金色野原（手島葵）」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。
慌ただしく駆け回る警官たちの足音。

それに混じって、テレビのアナウンサーの緊迫した声がかすかに聞こえる。

アナウンサーの声　　「またも痛ましい事件が起きました。現場にはまだ多数の死傷者が倒れています。警察と消防による、必死の救助活動が続いています。なお、犯人はまだ凶器を手にしたまま逃走してる模様です。くり返します。犯人は凶器を手にしたまま逃走中です。近隣の方は…。」

幕が開くと、弥三郎と伊吹の姿が見えてくる。

遠い昔を思い出すように、ゆっくりと動き出す二人。

二人は手を差し伸べながら、スローモーションで近づいていくが、黒頭巾をかぶった都の侍たちが現れ、弥三郎に斬りかかって行く。

幾度も斬られながらも、手を伸ばし続ける弥三郎。

だがその手は触れ合うことなく、弥三郎は倒れていく。
それを優しく抱きしめる伊吹。

都の侍たちが去っていくと、それを遠くから見つめている一匹の鬼（麻呂）の姿が見えてくる。

静かに流れていた歌声がふと止まる。

鬼

…ありやあ、鬼だ。恐ろしい鬼だ。え？鬼なんてもんがこの世にいたのかって？さあなあ、昔はそこら中にいたもんだが、今はさっぱり見えなくなっちゃった。（笑って）人間が、あんまり恐ろしくなっちゃったもんだからよ。鬼の出る幕が無くなっちゃったのよ。

…あいつかい？あいつは今でもそこにいるよ。もうかれこれ千年、たった一人で戦い続けてらあ。死ぬに死ねねえわけがあつてよ。…なんだよ。鬼にだって、鬼になる事情つてもんがあるんだよ。理由もなく人間様に悪さしてるわけじゃねえんだぜ。いろんな未練だとか、恨み言だとか、（伊吹を見て）愛しい男の為とかさ…。だけどよ、運命ってやつは残酷よ。何度生まれ変わろうと、何度巡り合おうと、二人の行く末は変わらねえ。千年たっても手の一つも取り合えねえ。まして昔に戻ろうなんて、天地がひっくり返ったって無理な話さ。だからあいつは戦ってるんだ。永遠に。いつかこの悠久の時間が途絶えるまで…。聞いてみるかい。あいつの話さ。鬼と呼ばれた男と女の、哀しい千年の恋物語を。あいつの名は伊吹。今から千年の昔、都の繁栄の為に鬼退治を続けてきた一人の…そう、鬼だ。

雷鳴と共に鬼の姿は消え、伊吹が動き出す。

時代は千年の昔へ。

音楽「熱くなれ（大黒摩季）」

音楽の中、幾人かの鬼たちが飛び込んでくる。
それは伊吹の鬼退治の情景。

鬼を一人、また一人と斬っていく伊吹。
やがて一人残った鬼に刀を向ける。
怯えて逃げようとする鬼を無情に斬り捨てる伊吹。

音楽が終わると同時に、与平次、駆け込んでくる。

与平次

伊吹様！

与平次、伊吹の前にかしこまり、

与平次

「ご苦労様でした。此度の鬼退治、信綱様もお喜びになることでしょう。急ぎ、都にお戻りの上、ご報告いただきますよう…」

伊吹、与平次を蹴る。

与平次

あいたつ！…あれ、なんか怒ってます？

伊吹

与平…お前は…！

与平次

うわ、怒ってる、怒ってる。僕、なんかしましたか。

伊吹

出かける前、鬼は殿様一人だと言ってただろう。

与平次

はあ。

伊吹

なーにが一人だよ。あっちこっちから家臣どもが出てきて、何人斬ったと思ってるんだよ。

与平次

鬼の手下です。いつも通り、ほら、スパッと。

伊吹

斬ってるこっちの身にもなってみる。

与平次

すいません！でもそこをザックザクやっちゃうのが、伊吹様の素敵なところ。

♪SHININ' MY LIFE 時間を越えて

うーん、素敵！

伊吹

(刀を投げ渡して) 疲れた。帰るぞ。

与平次

あ、はい。

そう言って去ろうとした伊吹の前に、麻呂が松の木の振りをして立っている。

麻呂

(鳥の鳴き声を真似て) チチチチ、チュンチュン。

伊吹・与平次 うわっ！

麻呂、手を叩いて、

麻呂

いやあ、見事見事。鬼神のごときとはまさにこのことか。恐ろしや、恐ろしや。

伊吹

…お前、いつからそこにいた。

麻呂

そなたの鬼退治の頃から、ずっとな。

与平次

気づかなかった…。

伊吹、麻呂を蹴りつける。

麻呂 あいた！

伊吹 なんだ、貴様は。貴様も鬼か。

与平次 やっちゃいましょう！

伊吹 おう！

麻呂 いやいやいや、拙者は旅の者。呪いなどを生業に、諸国を巡っておる者だがな。先頃のそなたの鬼退治に感服し…。

伊吹 鬼だ。斬る。

いきなり斬りつける伊吹。

思ってもみなかった展開に慌てふためき、必死に逃げる麻呂。

麻呂 待て、待て！ちょっと待て！

伊吹 なんだ？命乞いなら聞かんど。

麻呂 お前、いつもそうやって話も聞かずに人を斬るのか。

伊吹 なにが悪いんだ。

また斬りかかる伊吹。

麻呂、またも必死に逃げて、

麻呂 待て、待て！

伊吹 だからなんだ。

麻呂 よし、分かった。拙者も覚悟を決めた。ここはおとなしく斬られよう。だがそなた、受難の相が顔に出ておるな。男運が良くないのではないか。

伊吹 なんだと？

麻呂 好いた相手に振り向いてもらえない。

伊吹・与平次 ドキ。

麻呂 優しくしてもらえない。

伊吹・与平次 ドキ。

麻呂 そんな時にはこれだ！

懐からお札を取り出す麻呂。

伊吹と与平次、思わず乗せられ、それをのぞき込む。

麻呂 霊験あらたか、トモちゃん印の縁結び札。これを肌身離さず身に付けてさえいれば、どんな思い人とも結ばれること間違いなし。大国主神（おおくにぬしのかみ）様も真つ青のシロモノだ。普段なら米一俵でも交換せんところだが、美しいそなたが苦しむ姿は見るに忍びない。おまけにこのトモちゃん印の恋愛成就マニュアルもつけて、出血大サービスだ、持ってけ泥棒！

伊吹 いいの！？ほんとに？

麻呂 拙者とそなたの仲ではないか。そのお札を持って、思いっきり思い人の胸に飛び込むがよい。さあ！

そうやって、与平次を伊吹の前に突き出す麻呂。
顔を見合わせ、黙り込む伊吹と与平次。
麻呂、伊吹と与平次を交互に見て、

麻呂 …ん？どうした、二人とも。ほら、恥ずかしがらずに、さあ！
伊吹 …こいつのどこが思い人だコラ！

怒りに任せて斬りかかる伊吹。

麻呂 あ、いや、すまん！拙者の勘違いだったか！
伊吹 なにがすまん、このインチキ呪い師が！
与平次 伊吹様！

与平次、必死に伊吹を止める。

与平次 落ち着いてください！命令もなしに斬られては…！
伊吹 知るか！こいつはオレがぶった斬る。

麻呂 (飄々と) まあまあ、いいではないか。恋をするなら、身近なものが良いというぞ。触れ合ってみなければ人はわからんもんだ。
伊吹 まだ言っか！

与平次を振り払い、斬りかかる伊吹。
だが今度は、麻呂はそれをかわして伊吹の手を押さえつける。

伊吹 ……！
麻呂 これほど言っても分からんか。

麻呂の鋭い視線に、伊吹はなぜか不安をかきたてられる。

伊吹 …お前、何者だ。
麻呂 言ったであろう。旅の呪い師よ。

伊吹、麻呂の腕を振り払う。

麻呂 聞くところによると、都には世にもめずらしい鬼退治をする鬼がいるというが…そなたのことか。

「鬼」と呼ばれ、顔を曇らせる伊吹。

麻呂 かつてこの世を戦乱の世に陥れた、青い瞳を持つ鬼、カガチの一族。その生き残りが源氏の侍大将、信綱殿に仕え、鬼退治を続けていると聞く。百人鬼を斬れば、人となれる。己に課されし罪業を清めることができる。そなた、これまでに幾人の鬼を斬った。
伊吹 九十と五人。

残り五人。さて、そなたに斬れるかな。

伊吹 斬るぞ。

伊吹は決意に満ちた目で麻呂を睨みつける。

伊吹 オレは…鬼だからな。

なるほど。ではいずれ、また会おう。

麻呂、再び木の振りをする。

麻呂 チチチチ、チウンチウン。

与平次 (辺りを見回して) すごい、消えた！
伊吹 消えるか！

伊吹、麻呂を蹴りつける。

麻呂 (不満げに) ノリの悪いやつだな。こっぴつ愛嬌を愛してやらんと、男も寄りつかんぞ。
伊吹 うるさい！

麻呂、突っかかる伊吹を、さらりとかわして、

麻呂 では、またな。

麻呂、逃げていく。

伊吹 待て、コラ！…ちつくしよう。今度会ったらとちめてやる。

伊吹が麻呂に気を取られている間に、与平次、落ちていたお札をこっそり拾っている。
伊吹、それを目ざとく見つけて、

伊吹 お前、何してんだよ。

与平次 あ、いや…。

伊吹 やめとけ、やめとけて。そんなもん、なんの役にも…あ、そうか。お前、だれか好きなやつがいるんだな。

与平次 違います！

伊吹 隠すなって。だれだよ、だれだよ。

与平次 違いますって。いや、ホントそんなんじゃないんです。

伊吹 言え！言わないとおめえ、ぶった斬るぞ！

刀を抜いて、与平次に斬りかかる伊吹。

与平次 伊吹様！シャレになってません！

伊吹 うるせえ！言え、言え、言え！

刀を振り回しながら、与平次を追い掛け回す伊吹。

そこに、保昌を連れ戻した信綱がやってくる。

与平次

(信綱に気づいて) あ、あーっ！

伊吹、信綱に気づくと、うれしそうに顔をほころばせる。

伊吹

兄様(あにさま)！

信綱

何をしている、伊吹。

喜び、駆け寄ろうとする伊吹。

だが保昌が割って入り、伊吹に刀を突きつける。

保昌

下がれ、鬼！

伊吹

……！

与平次

申し訳ございません！

与平次、あわてて伊吹を下がらせ、頭を下げさせる。

与平次

先ほど、摂津国を騒がせし鬼、藤原政親を調伏いたしました。鬼の首は河原にてさらして

信綱

ございます。何卒、お改めを。

ご苦労だったな、伊吹。これでまた一つ、戦の種が消えた。

保昌

信綱は伊吹に優しく声をかけようとするが、保昌は厳しい表情でそれを止める。

信綱

あまり話されずな。

鬼と親しくされては、信綱様まで鬼の仲間と思われかねません。

保昌

保昌の言葉に、顔を曇らせる伊吹。

自分の存在が、信綱にとって負担となっていることを、伊吹は知っている。

与平次

(それを気遣うように) 伊吹様…。

保昌

どうぞお立場をお考えください。

信綱、申し訳なさそうに伊吹を見つめると、

信綱

伊吹。まもなく都が落成する。

伊吹

……。

信綱

二十年前のあの戦…。人と鬼とが戦ったあの戦で、都は焼け、幾千、幾万もの命が奪われた。ようやくだ。ようやく復興の兆しが見えてきた。新たな都が落成すれば、暮らしはさらに豊かなものとなるであろう。だが、あの戦の傷跡は、まだ癒えたわけではない。もう二度と、あのような哀しみをくり返さぬ為にも、戦の火種は消さなくてはならぬ。だからこそ…

伊吹

鬼退治が必要だ。…分かってるよ。その為にオレがいるんだろ。

信綱 伊吹。

伊吹 この体には、あの戦を起こした鬼の血が流れてる。こうして生かされてるだけでも、感謝しなきゃだもんな。

信綱 あと五人。お前が人と成りしその時には、必ず迎えに行く。

伊吹、さびしげに微笑んで、

伊吹 待ってるよ。だからその日まで…オレは鬼だ。

激しい音楽が鳴り響き、大江山の山賊たちが飛び込んでくる。

舞台は都の市中へと変わる。

S3 都・市中

都の市中で暴れ回る呉葉、虎蔵、熊蔵と山賊たち。

逃げ惑う都の人々を斬り殺していく。

呉葉 よーし、お前たち。金目のものは奪ったかい。

トラ・クマ はい、姐さん！

呉葉 だつたらさつきとずらかるよ。余計な邪魔が入らないうちにね。

トラ・クマ はい、姐さん！

三人が都を出ていこうとしたとき、騒ぎを聞きつけた伊吹が、与平次を連れて駆け込んでくる。

伊吹、山賊たちを見回して、

伊吹 お前たちか。近ごろ都を脅かす、大江山の鬼というのは。

呉葉 鬼とはご挨拶だね。この美しい呉葉様に向かって。やっちまいな！

伊吹と呉葉たちの戦い。

伊吹、手下たちを倒して呉葉に迫ったとき、弥三郎が現われる。

弥三郎をにらみつけると、斬りかかっていく伊吹。

弥三郎は、伊吹のまどった空気を敏感に感じて、

弥三郎 お前…鬼か？

伊吹 なに？

刀を抜かず、伊吹の振る刀を素手で捌いてみせる弥三郎。

やがて戦いのさなか、伊吹の顔をのぞき込んだ弥三郎、おもむろに、

弥三郎 合格！

伊吹 は？

音楽、切れる。

弥三郎、うれしそうにやけながら、

弥三郎 いやあ、まさかこんなところで、愛しの君と出会えるとは。神様、今日という日の出会い
をありがとう！

伊吹 なんだ、お前。
弥三郎 では、チェックします！

弥三郎、伊吹の太ももを触って、

弥三郎 合格！

伊吹 おい！

伊吹、殴ろうとすることがわされ、お尻を触られる。

弥三郎 合格！

伊吹 てめえ…！

伊吹、またもかわされ、胸を触られる。

弥三郎 ……。

伊吹 ……なんだよ、今の間は！

弥三郎 総計、八十三点というところですか。ん、合格！今日はこの女をさらってくぞー！
トラ・クマ ラジャー！

虎蔵、熊蔵、伊吹の腕を捕まえる。

弥三郎 ではさつそく。

弥三郎、伊吹に襲いかかろうとする。

伊吹、虎蔵、熊蔵を張り倒し、弥三郎に斬りかかろうとするが、またもかわされ、お尻を
触られる。

弥三郎 お尻、お尻！

呉葉 なにやっつてんだい、あんた！

呉葉、その弥三郎の耳を引っ張って伊吹から引き離す。

弥三郎 あいたたたた！

呉葉 こいつはあたしらを殺しにきた都の手先だよ。それをさらってくバカがどこにいたんだよ。

弥三郎、呉葉の顔を指さして、

弥三郎 うーん、不合格！

呉葉 この…バカちゃんが！（殴る）

弥三郎 あいたっ！
トラ・クマ 頭！

（弥三郎を助け起こす虎蔵と熊蔵。）

伊吹 頭？…お前が鬼の頭か。

弥三郎 ……。

伊吹 噂に聞く大江山の酒吞童子が、こんなふざけた男だったとはな。

弥三郎 ふざけた男？いい男って言ってくれねえか。

伊吹 名は。

弥三郎 弥三郎。

伊吹 弥三郎？

その名前に聞き覚えがある気がして、伊吹はふと眉をひそめる。

弥三郎 そうよ。オレ様があの大江山を束ねる賊の頭、弥三郎様よ。

トラ・クマ いよっ！

弥三郎 弥三郎に向かい、拍手する虎蔵、熊蔵。

伊吹、名前のことは忘れ、刀を構える。

弥三郎 おーっと、やめどいた方がいいぞ。女の細腕じゃ、オレには勝てねえよ。

伊吹 ……試してみるか？

一瞬、にらみ合う二人。

次の瞬間、伊吹は弥三郎に斬りかかっていく。

その刃を次々と交わす弥三郎だったが、最後に白羽取りをしようとして失敗する。

弥三郎 （頭が切れて）あたっ、あいたっ！

伊吹 （呆れて）ったく、変わった野郎だよ…。

それを大笑いしながら見ている虎蔵、熊蔵。

呉葉、弥三郎を叩いて、睨みつける。

呉葉 いつまで遊んでんだい、あんたは！（笑っている虎蔵と熊蔵に）お前たちも、バカにつき合

ってないで、さっさと行くよ！

トラ・クマ （慌てて）はい、姐さん！

虎蔵、熊蔵が弥三郎を連れていこうとしたとき、麻呂が現われる。

三人を手招きして集める麻呂。

伊吹と呉葉だけは、それに気づかず、

伊吹 （呉葉に）おい、お前！

呉葉、振り返ると伊吹にピシッと扇子を突きつける。

呉葉 美しさの秘訣かい？

伊吹 (また呆れて) は？

呉葉 女が美しくなる理由なんて、一つしかないさ。それはね、男に愛されることさ。

呉葉、笑いながら弥三郎を振り返る。

が、そこには弥三郎はいない。

二人、いつの間にか麻呂が商売を始めているのに気づいて、

呉葉 あんた、なにやってんだい！

与平次、お守りを手に伊吹に駆け寄って、

与平次 伊吹様！すごいですよ、いま縁結びのお守りが、50%オフ…。

伊吹 お前もなにやってんだ！

伊吹、与平次を蹴る。

麻呂 いやあ、美しいそなたに、また会いたくなってな。

伊吹 え…。

美しいといわれ、ちょっと喜んでしまう伊吹。

だが呉葉が「美しい」という単語に敏感に反応し、我が事のように、

呉葉 え、美しい？

みんな 違う！

呉葉、伊吹を睨みつける。

それを勝ち誇ったように見返す伊吹。

麻呂はその争いを無視して、弥三郎に、

それよりお主、危ないところだったぞ。

あん？

お主がこの美しい…

美しい!？

違う！

呉葉と伊吹、またにらみ合う。

麻呂 伊吹殿を口説きたくなる気持ちはよく分かる。が、靈験あらたかトモチちゃん占いによると、

二人の相性は…んんん…最悪。

弥三郎 なんだとコラ！

ざまあみろと笑う呉葉。
伊吹、なんだかムツとする。

麻呂 いやいやいやいや、これは本当にやめておいた方がいい。このトモちゃんの第六感にピーンと来たのだ。今ならまだ引き返せる。二人が本気で恋に落ちたが最後、苦難、災難ひた続き。千年の地獄に落ちること間違いなした。

弥三郎 んなバカな話があるか！
麻呂 ところが！（呉葉を指差して）はい！

呉葉 呉葉を見て、ビクツとする弥三郎。

呉葉 …へ？
麻呂 こちらのお方とは、なんとまあ相性抜群。
呉葉 え！

満面の笑顔で弥三郎を振り返る呉葉。
弥三郎、ものすごく嫌そうに、

弥三郎 やめる。

麻呂 一生幸せに暮らしていける、まさしく運命の赤い糸。

呉葉 （また振り返る）え！

弥三郎 マジやめる。

麻呂 いやあ、もつ、うらやましい！こんな所にも、美しい愛の花が芽生えていたんだねえ。
呉葉 そうじゃないかと思ってた。

うれしそうに弥三郎にしなだれかかる呉葉を、弥三郎は思い切り突き飛ばす。

弥三郎 悪いが、絶対ないからな。

呉葉 なんで、なんで！（麻呂に）ねえ、ちょっと！

麻呂 そういう時にはこれだ！

懐からひょうたんを取り出す麻呂。

全員、それを覗き込む。

麻呂 霊験あらたか、トモちゃん印の縁結びの水。

麻呂のペースに乗せられ、歓声を上げる一同。

麻呂 かの有名な貴船神社で、百晩丑の刻参りをして願を掛けた、これぞまさに聖水。これを一度その身に振りかければ、どんな男も女もお色気ムンムン。あつという間にモチまくると間違いなした。

麻呂はみんなの心を掴むように、矢継ぎ早に言葉が続けていく。
それに操られるように、伊吹たちも、弥三郎たちも、一喜一憂して声を上げる。

麻呂

普段なら米一俵でも交換せんところだが、(呉葉を見て)美しいあなたが苦しむ姿は見ると忍びない。おまけにこのトモちゃん印の恋愛成就マニュアルもつけて、出血大サービスだ、持ってけ泥棒!

呉葉

いいの!?ほんとに?

弥三郎

よせ、やめろ!

呉葉の手に聖水が渡りそうになり、あせる一同。

麻呂

拙者とそなたの仲ではないか。さあこの聖水で、今度こそ幸せな人生をつかもうではないか!さあ!

麻呂が聖水を呉葉に差し出したとき、全員がそれを奪おうと麻呂に詰め掛ける。

伊吹・弥三郎 いい加減にせんか!

混乱の中、伊吹と弥三郎は麻呂の手から聖水を奪い、蹴り飛ばす。

みんな

ああーっ!

呉葉

あたしの幸せが!

二人

よっしゃ!

二人、息の合ったコンビネーションに、思わず抱き合って喜んでいる。

麻呂、その二人の様子に気づいて、

麻呂

あ。

みんな

あ。

我に返る伊吹と弥三郎。

一瞬、顔を見合わせる。

弥三郎

…恋に落ちた。

伊吹・みんな えーっ!

音楽

伊吹、あわてて弥三郎を振り払う。

伊吹

ちよ、ちよっと待て。お前、いきなりなに言ってるんだ。

まじめな顔で告白され、動揺を隠せない伊吹。

鬼として嫌われながら生きてきた伊吹には、「好き」という言葉に対し、どう対処すればいいのかがまるで分からない。

だが弥三郎は、そんな伊吹を意に介さず、笑顔で詰め寄ってくる。

弥三郎 いやあ、実は初めて会った時から、これは運命なんじゃないかと思ってたんですわ。
呉葉 え、あたしは！？失恋！？あたしが失恋！？
弥三郎 黙れ、ババア！

ガツクリとうなだれる呉葉。
虎蔵と熊蔵、慌ててそれを慰める。

弥三郎 それじゃ、失礼しまーす。

弥三郎、伊吹に襲いかかろうとする。
伊吹、慌ててそれをかわして、

伊吹 ちよっと待った！

弥三郎 なんじゃい！

伊吹 オレたち…まだ会ったばかりだし。
弥三郎 恋に時間は関係ありません。

また襲い掛かる弥三郎。

伊吹、またそれをかわして、

伊吹 お互いよく知らないし。

弥三郎 これから深く知り合えばいいんです。

また襲い掛かる弥三郎。

伊吹、追いつめられながらも、必死に、

伊吹 待て、待て…！それにはオレにはほら、心に決めた男がいるから！

弥三郎 だれじゃい、そいつは！

伊吹 兄様…あ、いや、信綱様だよ！

麻呂 あーっ！

信綱の名前を聞いた瞬間、静まり返る一同。

伊吹 …あれ？

呉葉 あんた…鬼かい。

麻呂 バレちゃった…。

伊吹、顔を曇らせ、視線をそらす。

だが呉葉は追い討ちをかけるように、

呉葉 その青みがかった瞳…かつて都を焼き払った、カガチの一族か。

麻呂 またバレちゃった…。

カガチの名前を聞いた瞬間、怯えたように顔を見合わせる虎蔵と熊蔵。

呉葉 人様を鬼呼ばわりする割には、あんたの方がよっぽど鬼じゃないか。
トラ 姐さん、やばいっす。

呉葉のかけに隠れる虎蔵と熊蔵。

呉葉 ええい、放しな！
トラ・クマ 姐さん！

呉葉、二人を振り払って、刀を抜く。
だが伊吹を睨みつけるその目は、どこか同情も感じさせる。

呉葉 だったら邪魔するんじゃないよ。こんなあたしらでも、生きていかなきゃならないんでね。

伊吹と呉葉がやり合おうとしたその瞬間、弥三郎が突然、大声を上げる。

弥三郎 合格！
トラ・クマ (驚いて) 頭！

弥三郎、呉葉をどかすと伊吹の手を取って、

弥三郎 それじゃ、自己紹介も終わったことですし、これから二人つきりでお話しませんか。言葉のいらない、男と女のお話を…。

カガチの名を聞いても気にも留めない弥三郎に戸惑い、なすがままの伊吹。
呉葉、弥三郎を睨みつけ、

呉葉 ちょっと、あんた！

弥三郎 そう、怒るなよ。目尻のしわが増えるぞ。

呉葉 だれのせいだと思っただい！

弥三郎 トラ・クマ！お前らも、なにビクビクしてんだよ。こいつが鬼だって言うなら、お前らだって今は鬼だろっつが。

トラ・クマ あ、そっか。

思わず笑ってしまう虎蔵と熊蔵。

呉葉に睨まれ、慌てて口をつぐむ。

弥三郎、再び伊吹の肩を抱いて、

弥三郎 鬼と呼ばれるもん同士、仲良くやろうぜ。
伊吹 離せ！

伊吹、弥三郎を乱暴に振り払う。

伊吹 お前らといっしょにするな。オしはお前らを退治して、人になるんだ。
呉葉 なんだって…！

伊吹の言葉に、カッとなる呉葉。
弥三郎はそれを止めると、伊吹を見て、

弥三郎 そうカッカするなよ。そのきれいな目が台無しだぞ。
伊吹 ……！
弥三郎 また会おうぜ。よし、お前ら、行くぞ！
トラ・クマ おう！

弥三郎を先頭に、都を出て行く山賊たち。
呉葉も伊吹を睨みつつ、去っていく。

伊吹 (弥三郎を追って) おい！

残された伊吹と与平次。
舞台は信綱の屋敷に変わる。

S 4 信綱の屋敷

伊吹、弥三郎を思い出しながら、弥三郎に抱かれた肩を触っている。

伊吹 ……たく、変な野郎だよ。あっちこっち触ってきやがって…。
与平次 伊吹様…。

伊吹、与平次の心配そうな顔にハツとして、こまかすように怒った声を出す。

伊吹 あいつ、ほんとに頭なのかな。
与平次 ……。

与平次がなにか言おうとしたとき、信綱が出てくる。

信綱 伊吹。
伊吹 兄様…。

信綱の姿を見て、安堵の表情を見せる伊吹。

信綱 めずらしいな。お前が賊を討ち漏らすとは。
伊吹 討ち漏らしたんじゃないよ。見逃してやっただけだ。次に会ったら絶対…。
信綱 ……。
伊吹 なあ、兄様。

信綱に近づき、手を触れようとした時、

信綱

やめる！

信綱に乱暴に振り払われる。

伊吹

兄様…。

信綱

…お前はまた、鬼だ。

伊吹

……！

信綱の言葉に、ショックを隠せない伊吹。

言われ慣れてきたはずの「鬼」という言葉が、無性に胸に突き刺さる。

信綱

お前が人と認められるまで、あと五人。それまでは軽はずみなことはするな。

伊吹

…分かってるよ。

信綱

さもなければ、これまでのお前の努力がふいになる。オレはこの都を…。

伊吹

分かっているって！

信綱

伊吹…。

いつもと違う様子に、怪訝な顔になる信綱。

伊吹

…オレさ、うれしかったんだよ。あの戦が終わって、独りぼっちで泣いてたオレに、兄様は優しく声をかけてくれた。みんなが恐れるこの目を、きれいだと言ってくれた。だからオレは、兄様の為ならどんなことでもしようと思ったんだ。

信綱

伊吹。

信綱、伊吹に声をかけようとするが、それを警戒していたかのように保昌が現れる。

保昌

信綱様。

信綱

……。

信綱、伊吹に背を向ける。

それをさびしげに見ている伊吹。

保昌は伊吹を睨みつけると、冷たい声で、

保昌

帝よりの勅命である。鬼を三人、斬ってこい。

伊吹

……。

保昌

何をしている。さっさと行け！

伊吹は信綱を見つめるが、信綱は背を向けたままである。

うつむき、黙って行こうとする伊吹。

保昌はその背中に向かって、

保昌

いいか、お前はこの都のため、鬼を斬るためだけに生かされている。過分な夢を見るんじゃない。

伊吹
……！

足を止め、保昌を睨みつける伊吹。

信綱
よせ、保昌。

信綱様、もついい加減になさいます。あのような鬼に情をかけ、都でいったいどのように噂されているか、ご存知ないのですか。

保昌。

(伊吹に) お前も気安く屋敷に上がるな。お前はただ鬼を斬っていればそれでいい。さあ、行け！

伊吹は保昌を激しく睨みつけると、やがてゆっくりと口を開く。

伊吹
…なんだよ、その言い草は。

与平次
伊吹様！

与平次、慌てて伊吹を止めようとするが、伊吹はそれを無視して、

伊吹
お前らがのんびり寝てられんのはだれのおかげだよ。オレが鬼を斬ってるからだろうが。

それを「ただ斬ればいい」って、そんな言い方があるか！

貴様…！

刀を抜く保昌。

信綱
よせ、保昌！

与平次
(伊吹に) やめてください！

伊吹
都のことなんかしるかよ。オレはただ、人になれるって言うから斬ってるだけだ。

保昌に突つかかろうとする伊吹を、必死に押さえる与平次。

与平次
いけません、伊吹様。いけません！

伊吹
うるせえ、離せ！

与平次
人になるまでの辛抱です。あと五人、あと五人ですから！それまでは、どうか…！

必死にすぎる与平次の姿に、ついに引き下がる伊吹。

伊吹
…くそっ！

与平次
申し訳ありません！伊吹様には言ってお聞かせますから、どうか、どうかご勘弁を…。

土下座して、平謝りする与平次。

それを見て、刀を下ろす保昌。

与平次を見下して、

保昌
賢明だな、与平次。…忘れるな。オレはまだお前を、人とは認めておらん。

与平次、その言葉にビクリと肩を震わせる。

与平次 …分かっております。

保昌 都の民として認められたくば、この鬼と共に働け。

与平次 はい。

保昌 信綱様。

保昌、信綱を促し、去ろうとする。

信綱は、申し訳なさそうに伊吹を見て、

信綱 伊吹…。

…斬ってきます。オレにできることは、それしかありませんから。オレは兄様のために戦ってるんだ。

伊吹、励ますように与平次の肩を叩くと、去っていく。

与平次、伊吹の刀を持ってそれについていく。

その後姿を追っている信綱。

そこに、ふらっと麻呂が現れる。

麻呂 哀しいな。どれほど愛しく思おうとも、人と成るまでは触れ合うことも叶わぬか。

保昌 なんだ、貴様は！

信綱 よせ！

麻呂に向かい、ひざを突いてかしまる信綱。

それを見て、保昌も慌てて頭を下げる。

信綱、弥三郎に戻ったぞ。

……！

大江山に住まう山賊共を束ね、都を荒らしておる。帝も憂いておられる。

では、やはり大江山の酒呑童子というのは…！

そうだ。弥三郎だ。

……。

冷静を装いながらも、うつむく信綱。

麻呂はそれを見下ろしながら、

信綱、弥三郎を斬れ。あやつこそ、都にはびこる最大の鬼。生かしておけば、必ずや新たな戦の火種を産む。

……。

どうした。

いえ。

かつての友の首はとれんか。

返答に窮する信綱。
その心情を見透かしたように、薄笑いを浮かべながら信綱に迫る。

麻呂 全てはこの国の御為。だれ一人傷つくことのない、真に豊かな国を作る為。

麻呂、ふとひょうたんを取り出し、

麻呂 ところでどうだ。今なら特別サービスとして、この貴船神社の聖水を…。

保昌 聖水…！

思わず興味を引かれて、立ち上がる保昌。

信綱 保昌。

保昌 はっ…。

信綱の制止の声に我に返り、再び控える保昌。
だが麻呂は保昌を誘うように売り込んでくる。

麻呂 これさえあれば、どんな男も色気ムンムン！

保昌 なんと！

信綱 保昌。

保昌 はっ…。

我に返り、再び控えようとする保昌。

だがその前に、麻呂は聖水を保昌に差し出し、

麻呂 今なら50%オフ！

保昌 買った！

信綱 保昌！

保昌 綱様、ヤキモチですか？

信綱 やめんか！

麻呂 なんだ、お主、そっちか。ならばこの男性専用、特製媚薬…

保昌 (思わず歓声を上げ) おおっ！

信綱 いい加減になさいますせ！

二人で盛り上がりだした麻呂と保昌を、一喝する信綱。

その生真面目な信綱を、麻呂は不満げに睨んで、

麻呂 ホントにつまらん男だな…。

信綱、再びかしくまり、頭を下げる。

麻呂 承知いたしました。
…なに？

まるでその言葉を待っていたかのように、不敵な笑みを浮かべ、信綱を振り返る麻呂。
信綱は、先ほどまでとは異なり、冷静な声で繰り返す。

信綱 弥三郎の討伐、承知したと帝にお伝えくださいませ。

麻呂、信綱の肩を叩くと、笑いながら去っていく。

保昌も去り、一人残る信綱。

そこに、弥三郎が飛び込んでくる。

弥三郎 ツーナポン！

とっさに刀に手をやる信綱。

舞台は夜の、都のはずれに変わる。

S5 都のはずれ・夜

突然の弥三郎の来訪に、警戒の色を隠せない信綱。
それとは対照的に、弥三郎は明るく信綱に近寄ってくる。

弥三郎 なんだ、なんだ。あいかわらず、愛に悩んでるのか？愛のことだったらオレに聞け。プラ
トニックなこと以外だったらなんでも教えてやる。

弥三郎：お前、何をしに来た。

なんだよ、ツナポン。友だちに会いに来ちゃいけないのか、ツナポン。

信綱 弥三郎

そういつて、信綱の抜きかけた刀を納めてやる弥三郎。

信綱はその手を荒っぽく振り払う。

信綱 ツナポンっていうな。：昔の話だ。
つれねえな。

弥三郎

弥三郎が背中を見せた一瞬、刀を抜こうとする信綱。
だが弥三郎はそれをすかして、

弥三郎 いや、実はオレ、ついさっき恋に落ちてな。

信綱 恋？

何の話が分からず、思わず手を止める信綱。

弥三郎 一応結婚を考えているんだが、婚前交渉がまだなんで今一步踏み込まずに困ってるんだ。

信綱 これ、どっちがいいと思う？
なにか。

弥三郎 だから、婚前交渉を重ねてからプロポーズするべきか、プロポーズしてから交渉を重ねる

信綱

べきか。どっちにしたってやることやるんだけど、どっちが紳士的だと思うっ？知らん。

信綱

信綱は、変わらぬ弥三郎の馬鹿げたテンションに呆れ、思わず刀から手を放す。

弥三郎

そう言っなよ。ホントに困ってるんだって。今回はオレ、けっこうマジだと思っただよな。だってよ、会ったその日にベッドインしないなんて。こーいうの、純愛って言うのかな。

信綱

それがオレと何の関係があるんだ。

弥三郎

だって結婚となったら、一応お前の許可をもらっとかないとまずいだろう。

信綱

なんで。

弥三郎

その女、伊吹っていうんだ。

信綱

……！

弥三郎

伊吹って言うんだわ、困ったことに。

信綱

瞬間、信綱は刀を抜き、弥三郎を斬ろうとする。

弥三郎

弥三郎、それを止めて、

弥三郎

そうマジになるなよ。

信綱

……。

弥三郎

それとも、オレを斬れと言われたか。…変わらん、都も。

信綱

信綱、弥三郎の手を振り払う。

弥三郎

さっきまでとは違い、緊張した空気が二人の間に漂っている。

弥三郎

お前、あいつをどうする気だ。

信綱

なに。

弥三郎

あいつはカガチだ。どれほど鬼を斬ったところで、都が人と認めるか。

信綱

認めるさ。かつて都を焼いた鬼を調伏し、人にしたとなれば都の権威はますます上がる。

信綱

その言葉に、弥三郎は信綱を睨みつける。

弥三郎

信綱もその弥三郎を冷たく見据えて、

信綱

あいつは都にとって、なによりも必要な女だ。

弥三郎

…その後は。

信綱

あと？

弥三郎

利用するだけ利用して、そしてその後どうする気だって聞いてんだ。

信綱

信綱、視線をそらして、

弥三郎

…お前には関係ない。

信綱

ツナポン！

弥三郎

(珍しくキレて) ツナポンって言うな！

信綱

不満げに信綱を見る弥三郎。

信綱 …弥三郎、お前、もう一度都で働かないか。
弥三郎 なに。

信綱 今ならオシが取りなしてやる。この国のため、今一度お前の力を使ってみないか。

弥三郎 …すまんが、そりゃ無理だ。

信綱 弥三郎。

弥三郎 オシはもう、都には戻らん。

信綱 …なぜだ。いったい何があった。あの日からだ。お前が鬼退治に行った、あの日からお前は変わっちゃまった。おまえは村でいったい何を見た。

弥三郎、ふと寂しげに信綱を見て、

弥三郎 …言っても分からん。お前が都にいる限りな。

信綱 ……？

弥三郎 なあ、ツナポン。都人だけが人間か？人には人の、鬼には鬼の道理がある。鬼を退治するだけが道じゃねえって、なぜ分からん。

信綱は、その言葉を拒絶するように強い語調でさえぎって、

信綱 鬼は鬼だ。何があってもそれは変わらん。人は鬼を決して受け入れない。

弥三郎 綱…。

信綱 お前が都に戻らんと言うなら、(刀を向け)斬るまでだ。

弥三郎 やってみろ。

にらみ合う二人。

弥三郎 だがその時は、ひとかたならん犠牲を覚悟しろ。オシら大江山の鬼、いつでもめてえらと差し違える覚悟はできてんだ！

信綱、刀を納めると、去っていく。

それをにらみつけながらも、寂しげな表情を見せる弥三郎。

そこに、伊吹が何かを探しながら入ってきて、ゴソソと弥三郎にぶつかると。

S 6 都の外れ・夜2

それから半時ほどした、同じ場所。

伊吹は夢中で何かを探していて、弥三郎に気づいていない。

伊吹 えっと…聖水、聖水…っと。

別の所から虎蔵と熊蔵も聖水を探しながらやってくる。

トラ 聖水…聖水…っと。

弥三郎、三人を怪訝そうに見回して、

弥三郎 …なんなの、これ？

三人は、相変わらず足下ばかりを見ていて、弥三郎にも、互いの存在にも気づいていない。

伊吹 ちつくしよう、ねえなあ。思いっきり蹴り過ぎたかな…。

一方で虎蔵と熊蔵、互いに顔を見合わせて、

トラ 早く見つけろ。あんなもんが頭の手に入ったら、この世の女はみんな地獄だぞ。

クマ おう…あれ、でももしあれが、姐さんの手に入ったら？

…男が地獄だ。

トラ …(顔を見合わせて) やつべえ…。

慌てて探しに戻る二人。

その拍子に伊吹と背中合わせにぶつかってしまふ。

三人 あ、すいません。

ろくに相手を見ずに頭を下げ、そのまま何事もなかったかのように探し続ける三人。

弥三郎、いい加減あきれて、声をかける。

弥三郎 お前ら、なにやってんだ。

その声に、三人は初めて弥三郎の存在に気づく。

伊吹 うわっ！弥三郎！

トラ・クマ 頭！

さらにお互いの存在に気づき、驚く三人。

三人 うわわっ！

伊吹 お前ら何してんだ！

トラ そっちこそ！

伊吹 あ、さてはお前らも聖水を…！

トラ え、まさかそっちも！

弥三郎 聖水？

弥三郎にバシてはまずいと、慌ててこまかす三人。

伊吹 あ、いや、なんでもない！

トラ・クマ なんでもありません！

弥三郎 ……。
伊吹 なんでもない、ホントになんでもないぞ！オレ別に、なんにも探していないからな。

そこに、与平次が聖水を持って駆け込んでくる。

与平次 伊吹様！例の聖水、見つけました！
三人 わっ、わっ！

慌てて弥三郎の耳を塞いだり、聖水が見えないように邪魔をしたり、大騒ぎになる。
だが与平次はそれに気づかず、ひたすら自慢気にしゃべり続ける。

与平次 いやあ、苦劳しましたあ。あっちこっち駆けずり回って、もうヘトヘトです。でもこれで、
伊吹様はモテモテに…。
伊吹 あーっ、足が滑った！

伊吹、聖水を取り上げると、また蹴り飛ばす。

三人 あーっ！

伊吹 (こそつと) もっかい探してこい！

与平次 えーっ！

伊吹 いいから行け！

トラ オレたちもだ！

クマ はい！

与平次、虎蔵、熊蔵、駆け出していく。

弥三郎 ……。

伊吹、何事もなかったように弥三郎を振り返り、

伊吹 よう。

弥三郎は軽く笑つと、同じく何も見ていないかのように、

弥三郎 なんか、探しもんか？

伊吹 いや、別に？

弥三郎 ふーん。

優しい目で伊吹を見つめている弥三郎。

伊吹、その視線に気づいて、

伊吹 ……なんだよ。じろじろ見るなよ、やらしいな。

弥三郎 お前、もうちょっと女らしくした方がいいぞ。

伊吹 はあ？

弥三郎　そうすりや、男なんかいやでも寄ってくる。
伊吹　（あせって）男！？いや、男なんかオレ、興味ないぞ。
弥三郎　ほう、そうか？
伊吹　当たり前だろ。オレは鬼だ。
与平次　伊吹様！

そこに、与平次と虎蔵、熊蔵が聖水をとり合いながら戻ってくる。
あまりのタイミングの悪さに、いらだつ伊吹。
与平次、やはりそれに気づかず、虎蔵と熊蔵を振り払うと、自慢気に聖水を差し出す。

与平次　やりました！私こと与平次、みごと聖水を勝ち取りました！
伊吹　帰れ！

伊吹、またも聖水を蹴り飛ばす。

トラ・クマ　ああーっ！
与平次　なんですかあーっ！
伊吹　（与平次を殴って）いいから行け！
与平次　あいたっ！ちくしょーっ！

与平次、虎蔵、熊蔵、またも聖水を追いかけて去っていく。

伊吹　（弥三郎を見て）なんでも、ない！

弥三郎、優しく笑って、

弥三郎　心配すんな。
伊吹　え？
弥三郎　お前は十分いい女だ。

音楽

その言葉に、ドキッとする伊吹。
初めて自分を「女」として見る男の存在に、逃げるように視線をそらす。

伊吹　…ホントにふざけた男だよ。
弥三郎　いい男、だ。

そう言って、弥三郎は自慢気に伊吹を見る。
その言い草に思わず笑ってしまふ伊吹だったが、やはりまっすぐに弥三郎を見ることができず、また視線をそらしてしまふ。
それでも、優しく伊吹を見つめている弥三郎。
一時、何も言えず、かといって立ち去ることもできない、そんなもどかしい時間が流れる。

弥三郎。ふと地面に腰を下ろして、

弥三郎 伊吹…。鬼は嫌か。

伊吹 ……なんだよ、突然。

弥三郎 いいから。

伊吹 ……そりゃあ、嫌だよ。ずっとそう言われて生きてきたんだ。ずっと…生まれたときから…

弥三郎 ……。

伊吹、寂しげなまなざしで辺りを見回す。

二人の前には、都が広がっている。

伊吹の思いを理解しつつも、黙って聞いている弥三郎。

伊吹

オレはな、鬼なんだよ。どんなに鬼を斬ったって、それは変わらない。オレが鬼退治をして都に戻るだろ。聞こえてくるんだよ、みんなの声。鬼がきた。また鬼がだれかを斬ってきた。怖いねえ、恐ろしいねえ、鬼退治が終わったら、どこかに消えちまえばいいのねえ…。

弥三郎 ……。

伊吹

さっきのやつ、与平っていうんだけどさ、そいつの住んでた村は、鬼の住み処だって言われて、都に焼かれちゃったんだけど、そいつだけは都に降ってきたんだ。だけどやっぱり、人とは認めてもらえなくて、こんなオレの、カガチの世話役をやらされてる。別にあいつがどうっていうんじゃないやねえんだぜ。でも人にならなきゃ、やっぱり幸せじゃあねえな。

やはり、弥三郎は黙って聞いている。

その真意がつかめずに戸惑い、「こまかすように明るくしゃべろうとする伊吹。

伊吹

なんだよ。お前は笑うかもしれないけどさ、こんなオレだって、ちょっとくらいは幸せになりたいって思うんだぜ。大したことじゃねえんだ。ただ朝起きたら家族がいて、外に出たら友だちがいて、いっしょに笑って、泣いて、喜んで…。そんなことでもいいんだよ。でもオレが鬼でいる限り、だれにも愛してもらえない。オレが鬼でいる限り、抱きしめてもらえない。この手の一つも取ってもらえない。兄様だって…。

弥三郎 ……そっか。

その言葉に、初めてまっすぐに弥三郎を見つめる伊吹。

いつものふざけた調子ではない、まじめな弥三郎の瞳の奥には、伊吹は自分の片割れともいえる、同じ哀しみの色がある。

その時、伊吹は初めて会った時から感じていた疑問が、間違いではなかったことを確信する。

伊吹、まるで他人のことを話すかのように、しゃべり始める。

伊吹

オレ…昔、聞いたことがあるよ。柏原弥三郎って、侍大将のこと。

弥三郎 ……！

ほら、兄様が幼なじみで、ずっといっしょだっただろ。そいつは強くて、勇敢で、女癖が悪いのが玉に瑕だったけど…都中の、みんなの憧れだったって。

弥三郎
伊吹 ……。
お前、なんで都を出たんだ。なんで鬼になったんだ。

だが弥三郎はそれには答えず、黙って去ろうとする。

伊吹 教えてくれ、弥三郎。お前はなんで鬼になった。なんで鬼になんかなれたんだよ。鬼になつたって、いいことなんか一つもねえじゃねえか。なのはどうしてみんな鬼になれるんだ。オレはさ、どうしても分からないんだよ。

それは伊吹がずっと抱えてきた疑問である。

それを背中で聞いていた弥三郎、一瞬の後、伊吹を振り返ると、

弥三郎
伊吹 お前、山に來い。
え？

オレといっしょに、大江山に來るんだよ。心配するな。山の連中に手出しはさせねえ。

…お前、なに言ってるんだよ。

伊吹 お前だってわかっているだろう。オレたちは鬼だ。鬼と呼ばれる人間だ。この世に都がある限り、それは変わらねえ。だから…。
やめろ！

伊吹、語氣荒くそれを拒絶して、

伊吹 鬼は…ダメだ。

伊吹…。

伊吹 オレは人になりたいんだ。ならなきやいけないんだ。兄様のためにも、与平のためにも…。

お前はいい奴だけどさ、でもオレは…もう鬼って呼ばれるのはいやなんだ。

伊吹！

伊吹 お前こそ、山を下りろよ。都に來いよ。なんでお前、鬼になったんだよ。鬼になるから、戦わなきやいけなくなるんじゃないか。そんな生活捨ててさ、都の人たちといっしょに生きていけばいいじゃないか。

(哀しそうに笑って) …残念だが、オレはそんなに器用じゃねえんだ。

弥三郎、去ろうとする。

伊吹 弥三郎！

……。

伊吹 お前が山にいる限り、お前は鬼だぞ。

ああ。

伊吹 オレはお前を斬りにいくぞ。

ああ。

弥三郎 弥三郎！

弥三郎、振り返って、

弥三郎

…大江山で、待ってる。

弥三郎、足早に去っていく

言い様のない哀しさを胸に、立ち尽くしている伊吹。

その伊吹の後ろから、ゆっくりと麻呂が出てくる。

麻呂

だから言ったろう？相性は悪いってさ。

伊吹

(驚いて) お前…！

麻呂

信綱。

麻呂の声に従って、信綱が保良、与平次を連れて出てくる。

その様子に、麻呂の正体を察する伊吹。

与平次の手には、伊吹の刀。

信綱は伊吹を見据えると、決意に満ちた声で命令を伝える。

信綱

伊吹、たった今、勅命が下った。

伊吹

……。

信綱

最後の鬼退治だ。都の西、大江山に夜な夜な都を脅かす、鬼が住むという。

伊吹

大江山…！

信綱

弥三郎を斬れ！

伊吹

兄様！

伊吹の非難の声を、信綱は冷静にかわして、

信綱

伊吹、見ろ、この都を。だれもが間に怯えることなく、穏やかに暮らしている。ようやく訪れた平穩の日々を謳歌している。オレはもうこれを失いたくない。

伊吹

……。

おそらく、信綱が見ている都と自分が見ている都は違う。

いつの頃からか気づき始めていたそのことを、今はっきりと意識する伊吹。

信綱

いいか、伊吹。この都を作ったのはお前だ。弥三郎を斬り、帝のお許しを賜れば、お前も

人になれる。だれに気づかうこともなく、堂々と生きていけるんだ。

伊吹

堂々と…。

信綱

そうだ。

伊吹

人として…。

信綱

そうだ。

与平次

伊吹様。

伊吹の刀を持って、傍らに控える与平次。

だが伊吹はその刀を、そして信綱を見つめると、静かな声で問い掛ける。

伊吹

信綱様…。

信綱 ……！

伊吹 もし、この鬼退治が終り、それでも人と成れなかったとしたら…。

信綱 なに。

伊吹 それでもあなたはわたしを迎え入れてくれますか。たとえ共に鬼と呼ばれようとも、あなたの作った、この美しい都から石持で追われようとも…。

一度として考えたことなかった問いに、言葉に詰まる信綱。

伊吹 ……いいのです、私は鬼。人の心に潜む闇。生まれ落ちたその時から、私の定めは決まっていたのです。

そう言いながらも、伊吹の心の中には、弥三郎の哀しい瞳が浮かんでくる。

伊吹 ……でも兄様、一つだけ教えてくれませんか。鬼のいなくなったこの都は、本当に幸せな国なのです。鬼を退治し、畏れをなくしたこの都は、本当に幸せな国なのです。これから千年、鬼をなくしたこの国で、人は本当に幸せに暮らしているのでしょうか、争いもなく、憂いもなく、人は人を敬い、慈しみ、愛し合っているのでしょうか。

そう問い掛ける伊吹の姿を、麻呂は遠くから冷たいまなざしで見つめている。

だがそのことに、誰一人気がついてはいない。

信綱は、まるで自分に言い聞かせるように答える。

信綱 必ず…。私は、そう信じている。

一瞬、見つめあう伊吹と信綱。

やがて伊吹は決心したように、

伊吹 だったら行きます。この国の為、数多の人々の為、あなたの為…弥三郎鬼を、私は斬ります。

音楽

刀を差し出す与平次。

伊吹はそれをゆっくりと抜いていく。

大江山をにらみつけ、一歩ずつ踏みしめるように都を出て行く伊吹。

その背後から、麻呂の荒々しい叫び声が響いてくる。

麻呂 我らが欲するのは酒呑童子の首一つ。忘れるな。都の落成は次の満月の日。それまでに弥三郎を討ち取れないときは、都の軍勢二万が大江山を焼き尽くす。戦を望まぬならば、すぐに弥三郎の首をとれ。

刀を手に、一人大江山に乗り込んでいく伊吹。

山の中、大江山の鬼たちと戦う伊吹。
次々に鬼を斬ったその先に、弥三郎の姿が見えてくる。
真剣に刀を交える二人。
その二人の間に、呉葉が割って入ってくる。

呉葉　本気なのかい。あんた、本気で都につく気なのかい。
伊吹　それがオレの生きる道だ。
呉葉　残念だね。あんたなら分かってくれると思ってたんだけどね。

伊吹に斬りかかっていく呉葉。
伊吹、それを受けながら、

伊吹　お前たちこそ、なんで鬼の道を選ぶ。なんで都に逆らう。人になって、都で暮らせば済むことじゃないのか。

伊吹の言葉に、カッとなる呉葉。

呉葉　ふざけるんじゃないよ！なにが人だい、なにが鬼だい。あたしから見りゃ、都が鬼さ。
伊吹　なに。

あたしはね、都に村を焼かれたんだ。あたしの家族も友だちも、みんな都に殺されたんだ。あたしだけじゃない、トヲも、クマも、山も連中も、

一瞬、哀しい目で伊吹を見る呉葉。

呉葉　…あんただってそうじゃないのかい。
伊吹　オレが？

あんたにだって親がいたろう。兄弟もいたろう。そいつらを殺したのはいったいだれだい。都だろうが。

……。

あんた自分を鬼だって言うけどね、そう言ってるあんた自身が、あんたを、あんたの家族を鬼にしているんだって、なんでそれが分からないんだい。

再び刀を交える二人。

だが伊吹の中に生じた迷いが、刀の振りを鈍らせていく。

呉葉に打ち負ける伊吹。

呉葉、その伊吹を見下ろして、

それでも、都に味方するっていうんなら…斬りな。
なに。

人を斬って、人になれるって言うなら、本当にそんな道理が立つんなら、腹すえて、あたしら全員たたく斬りな。

……。

どうしたんだい。それがあんたの生き方なんだろうが。あんたが斬らないなら、あたしが

伊吹
あんたを斬るよ。さあ！
うるせえ！

伊吹、再び刀を握りしめ、斬りかかっていく。
呉葉をかわし、弥三郎へと向かう伊吹。
だが互いに刀を突きつけあったその瞬間、弥三郎は刀を納め、「斬れ」というように伊吹に背を向ける。

伊吹
……！

覚悟を決め、刀を振り上げる伊吹だったが、やはり斬ることができない。
呉葉、それを見て、伊吹を殴りつける。
刀を落とし、うなだれる伊吹。
呉葉、それを冷たく見据えて、

呉葉
あたしは都を絶対許さない。…そして、都に味方するヤツもね。

呉葉、伊吹を斬ろうとする。

弥三郎
よせ！

呉葉
…あんた。

弥三郎
もういい。やめろ。

呉葉
なに言ってるんだい。こいつはね、あんたを殺しにきたんだよ。結局都に心を売ったんだ。それを…！

弥三郎
分かってる。

呉葉
…分かってる？

弥三郎
んなことあ、重々分かってる。だからもう退け。

呉葉
……。

弥三郎
退け！

呉葉、伊吹と弥三郎を交互に見やっつて、やがて刀を下ろす。

呉葉
…そうかい。惚れた女は斬れないってわけか。

弥三郎
呉葉。

呉葉、弥三郎を振り返る。

その目は都に対する恨みに満ちている。

呉葉
弥三郎、あんたまさか、都に未練があるんじゃないだろうね。
バカを言っつな。

弥三郎
あつちや困るよ。あんたはあたしらの頭領なんだからね。あたしは、あんたに賭けたんだ。あんたなら、きつと都を倒してくれる。あたしらの仇を討ってくれるって。今さらやめるなんて言わせないよ。あんたは都と戦うんだ。あたしといっしょに。なにがあつても。
…呉葉。

呉葉、伊吹をにらみつけて、

呉葉 …絶対にな。

呉葉、去っていく。

弥三郎、それを寂しげに見送ると、

弥三郎 …気にするな。ちつとばかり、頭に血が上ってるだけだ。

だが伊吹は、うなだれたまま、

伊吹 …弥三郎、一っだけ教えてくれないか。

…なんだ。

オレが今まで斬ってきたのは、鬼か、人か。

……。

伊吹 答えてくれ！

ゆっくりと口を開く弥三郎。

弥三郎 …人だ。

……。

伊吹 だがそれは…。

伊吹 分かった。…ありがとう。

うつむく伊吹。

それを見て、顔を見合わせる虎蔵と熊蔵。

やがて弥三郎は、いつもの明るい調子で、

弥三郎 伊吹。お前、しばらくここで暮らせ。

……！

勘違いするんじゃないぞ。お前は捕虜だ。捕虜なら、頭のオレの許可なく、勝手に出て行

くんじゃねえって言ってんだ。

なに言ってるんだよ、お前。オレは…

気にすんなって。惚れた女に、人も鬼も関係あるかよ。

弥三郎、そう言って笑うと、去っていく。

虎蔵、熊蔵、それについて行くようにして、ふと伊吹を振り返る。

伊吹 鬼っていったいなんなんだ。オレはいったい…。

独り言で、ぼつりとつぶやく伊吹。

虎蔵、熊蔵、顔を見合わせると、伊吹のそばに行く。
身を固くする伊吹に、二人は優しく、

ト 伊吹さんはい吹さんですよ。山にしようが、都にしようが、そんなこと関係ありません。
ト 吹 ……。
ト 吹 いいじゃないですか。人間、生きるのに理由なんかありませんよ。こんな世ですから、
ト 吹 だれだつてだれかの恨みを買ってます。

不思議そうに虎蔵を見る伊吹。
虎蔵、弥三郎と同じような明るさで、

ト 吹 あ、オレ、トラって言います。虎蔵のトラです。で、こいつが、
ク マ 熊蔵のクマです。
ト 吹 ま、伊吹さんから見たら、頭のあとにくっついてるただの雑魚だと思つてたかもしれませ
ク マ んが、
ク マ やつぱりただの雑魚です。

そう言つて、大笑いする二人。

ト 吹 さ、それじゃ行きましょう。山を案内します。

そう言つて、二人は伊吹を連れて行くこととする。
だが伊吹は戸惑つて、

伊 吹 お前ら…いいのか。さっきまで斬り合つてた相手だぞ。
二 人 コラーツ！コラコラコラコラ…コラ！

伊吹の頭を叩く二人。

ト 吹 大江山をなめちやいけません。山にはね、ついこの前まで殺し合つてた連中がゴロゴロし
ク マ てますよ。

ト 吹 自慢じゃありませんが、オレとこいつなんか、何回やり合つたと思ひます？
ク マ 仲が悪かつたんですわ、オレの村と、こいつの村が。

ク マ 村同士の争いで十回、個人的に三回。
伊 吹 個人的？

二人、なぜか自慢気に、息の合ったコンビネーションでしゃべり出す。

ト 吹 実はですね、オレの住んでたトラ村と、
ク マ オレの住んでたクマ村の間には、
二 人 ニヤニヤとネコ村があまりまして、
ト 吹 そのネコ娘をめぐつて、オレとこいつが決闘したんですわ。

二人、戦う真似をする。

ク マ そりゃあもう、何日も続くような、激しい戦いでした。体中に無数の傷を負い、こりゃあ

ト ラ もう二人とも死んでしまっんじゃないかと思ったその時、ネコ娘が叫んだんです。
(ネコ娘の真似をして) もうやめて！
ク マ 振り返ると、ネコ娘が目涙を溜めてブルブル震えながらこつちを見てました。
ト ラ もう戦つのはやめて！
ク マ え！
ト ラ 悪いけど、あんたらなんか眼中にないから。
ク マ (驚いて) えーっ！
ト ラ バッカじゃないの。
ト ラ 二人、また大笑いする。
ト ラ 二人、また大笑いする。
ト ラ いやあ、フラれたフラれた。
ク マ まったく脈がありませんでした。
伊 吹 完全なオレたちの勘違いでした。
ト ラ でも三回って…。
ト ラ はい、まったく同じパターンで、三回フラれました。つまりオレとこいつは、いいライバルってわけです。
ト ラ 二人、また笑う。
ト ラ とまあ、こんなオレらでも生きていける、それが大江山です。
伊 吹 生きて…いける…？
ト ラ 虎蔵、ふとまじめな顔になって、
ト ラ オレには兄貴がいますね、仲のいい兄弟だったんですが、その兄貴がある日フラツと村を出ていっちゃったんですよ。それからしばらくして、都の侍たちがやってきました。あつという間でした。あつという間にオレのトラ村も、
ク マ オレのクマ村も、
ト ラ 焼け野原になりました。兄者が村を売ったんです。兄者のせいで村は都に焼かれたんです。…。
ト ラ オレも都人に追われて、必死にここまで逃げてきました。何度死にかけたか分かりません。それが全部兄者のせいだって思ったら、憎くて、悔しくて…。
ク マ 昔を思い出し、暗い表情になる虎蔵。
ト ラ 伊吹もまた、それが自分たちのやってきたことなのだと、顔を曇らせる。
ク マ …。
ト ラ 二人を気づかうように、何かを言いかける熊蔵。
ク マ それに気づいて、虎蔵は笑顔に戻る。
ト ラ でもね、ここに来て、ちょっと分かった気がするんですよ。兄者は兄者で、必死に生きようとしてるだけなんだって。あのころは…ひどい暮らしてましたから…。

伊吹 トラ ……
オレ、思うんです。きつと人ってのは、どうしたってだれもがだれかの鬼になっちゃうんです。そういう風にできてるんです。だから、心配しないでここにいてください。ここに
いる限り、伊吹さんは人間ですよ。
…ありがとな。

伊吹 やっと、小さく笑顔を見せる伊吹。
虎蔵も安堵したように笑うが、ふと大事なことを思い出し、

トラ あ、でも気をつけてくださいね。山にいてってことは、頭と二十四時間ずっといっしょ
てことですから。

伊吹 あ…。
ホント、一瞬でも隙を見せたら、何をされるか分かりませんよ。ほらあの人、理性より本
能の方が、圧倒的に強い人ですから。

伊吹 (何度もうなずいて) 分かった。
トラ じゃ、オレたち行きます。

二人、行きかけて、また同時に振り返る。

トラ ホント、気をつけてくださいよ。
伊吹 分かったって。

二人 じゃ。

虎蔵、熊蔵、楽しそうに去っていく。

いつの間にか、出てきてそれを見ている麻呂。

一人笑っていた伊吹、麻呂に気づいてハッとす。

どうした。なぜ斬らん。

…。

麻呂 満月の日は近い。そなたが斬らねば、戦となるぞ。それとも、都を…信綱を敵に回す気が。

伊吹 冷たい声でそう言う麻呂の姿は、どこか人ではなく、伊吹の心に潜む闇のようにも、何か
巨大な意思のようにも見える。

伊吹 ……都と戦いたいわけじゃない。
麻呂 ならば、

ただもう分からないんだ。なんのために鬼を斬るのか。

酒吞童子の首なくば、都の基盤は崩れ落ちる。人は鬼を、決して受け入れない。

伊吹 うつむく伊吹。

麻呂、場をこまかすように、にこやかに、

麻呂 伊吹、そこでどうだ。このトモちゃん印の魔よけのお守り…。
吹 いらん。

麻呂 最近売れ行きが…。
伊吹 いらん。
麻呂 今ならビックリ価格75%オフ…。
伊吹 いらん。
麻呂 (落ち込んで) 商売、替えようかな。

伊吹、去りかける。

麻呂 忘れるな。お前は力ガチだ。他の鬼とは違う。この山の者たちも、いずれお前を重荷に思うときが来るだろう。

……。

伊吹 ……。
麻呂 この世に都がある限り、お前はあの青い瞳からは決して逃れられん。お前が山にいる限り、戦となるぞ。それでも…

(遮って) それでも、あいつは言ってくれたんだ。

決意に満ちた目で、麻呂を見る伊吹。

伊吹 オレは…いい女だって。

音楽「ロマンスの神様(広瀬香美)」

麻呂 また…都で会おう。

不敵に笑って、去っていく麻呂。

S 8 大江山・集落

音楽の中、伊吹の大江山での賑やかな生活が描かれる。それは伊吹にとって、初めて「人」としての幸せを感じた時間でもある。そして時を追うごとに、弥三郎に心惹かれていく伊吹。やがてそのじゃれあいの中で、抱きあう伊吹と弥三郎。

トラ・クマ あーっ！

音楽、切れる。

虎蔵、熊蔵、慌てて伊吹を弥三郎から引き離す。

トラ 何してるんですか！離れなさい、離れなさいよ！
弥三郎 なにすんじゃ、コラ！

弥三郎を必死に押さえつけようとする熊蔵。

トラ だからあれほど言ったじゃないですか。頭には気をつけてくださいって。すまん。

ト ラ いい人ぶって近づいて、隙を見て押し倒す。あれが頭の手なんですから。
伊 吹 すまん。
ト ラ いいですか。頭の半径一メートル以内に近づくことは、ライオンの口の中に首を突っ込むようなもんなんですから。

弥三郎、熊蔵を張り倒して、

弥三郎 なんじゃ、コラ、お前。わしゃまたケダモンか。
ト ラ ケダモンでしょうが！とにかく、オシらの側から離れないでください。伊吹さんのことはオシらが絶対守りますから。

そっいいながら、伊吹に寄り添う虎蔵と熊蔵。

ク マ ……なにしてんだ、お前。離れる。
ト ラ お前こそ離れる。

伊吹を取り合って、ケンカを始める二人。
やがて弥三郎に張り倒される。

弥三郎 なにしとんじゃ、お前ら！
ト ラ・ク マ あ、すいません！

二人、慌てて頭を下げて、

ト ラ すいません。ほんと、すいません。いや、ほら、うちの山は男所帯で、女らしい女がいな
いもんですから、つい…。ホントすいません！
弥三郎 どっちがケダモンじゃい。

伊吹、からかうように二人を見て、

伊 吹 女ならいるじゃねえか。あの美しい呉葉が！
三 人 うわあっ！

おびえる三人。

伊 吹 なんだよ。だからあの美しい呉葉が！
三 人 うわあっ！

またおびえる三人。

伊 吹 (おもしろがって) なんだよ。
三 人 恐ろしいことを言うな！
ト ラ どこをどう見たらあの人か女に見えるんです。
ク マ 目、腐ってんじゃないですか。

熊蔵、伊吹に殴られる。

クマ あいたっ！

トラ じゃあ、想像してみてくださいよ。

弥三郎・熊蔵 よし！

三人、虎蔵の言葉に合わせて、一つずつ動いて見せながら、

トラ オしらが一働きして、山に戻ったら、姐さんがエプロンなんかして「おかえりなさい」とか言ってる姿…。

三人、顔を見合わせて、悲鳴を上げる。

三人 いやーっ！

伊吹 あ、呉葉。

三人 (今度はおびえて) うわあーっ！

伊吹 (笑って) ウソだよ。

三人 やめてよ、もう。

その時、フラッと呉葉が現れる。
だがみんな、それには気づかず、

伊吹 いいじゃねえか。あいつもあれでけっこう、女だと思っぞ。

弥三郎 どこがじゃー！

トラ いいですか。伊吹さんは、あの人がどれほど恐ろしいか、知らないからそんなことを言えるんです。

弥三郎・熊蔵 そう！

伊吹、呉葉に気がつく。

伊吹、なんとか伝えようとするが、盛り上がっている三人は全く気づく様子がない。

トラ あの人はですね、昼間こそあんな姿をしていますけど、一度日が沈んだ途端、どうなると思います。

呉葉、虎蔵を張り倒す。

クマ 口は裂け、牙が伸び、髪を振り乱して都を彷徨い、若い男の生き血をすする。その姿は鬼か、それとも土蜘蛛か。

呉葉、熊蔵を張り倒す。

弥三郎 聞く所によると、あいつの正体は、百をとうに超える鬼婆で、男の生き血を吸わないと、もとの姿に戻っちまうらしい。最近急に老けてきてんだよ。絶対あれ、切れかかってんだ

よ。

一人、ゲラゲラと大笑いする弥三郎。
呉葉、弥三郎の肩をたたく。

弥三郎
なんじゃい、こら！…あ、呉羽さん。
だれが鬼婆だった？

三人
すいません！
ぶっ殺す！

三人を追いかけ回す呉葉。

弥三郎
待て、落ち着け！鬼婆だったって、たいしたことじゃねえぞ。ただ鬼にババアがくつついた
だけじゃねえか。

みんな、笑う。

呉葉
殺す。

呉葉、また追いかけて回す。

弥三郎
分かった、分かった。じゃ、美しい鬼婆ってことなんだ。

みんな、笑う。

呉葉
殺す。

呉葉、また追いかけて回す。

弥三郎
なんだよ、そう怒るなよ。仲良くやろうぜ。

三人、伊吹に寄り添う。

弥三郎
…で、なんか用か？

あんたに話があつてきたんだけどね。

話？

話す気も失せたわ！

弥三郎
逃げる！

一目散に逃げていくみんな。

一人、逃げ遅れた虎蔵を捕まえて、腕を振り上げる呉葉。

トラ
やめて！お願いだからやめて！すいません、ホントすいませんでした！

そう言いながらも、虎蔵はどこか状況を楽しんでいるようにも見える。それを見て、呉葉、ふと虎蔵を放す。

トラ あれ、姐さん？

呉葉、虎蔵を見て、寂しげに、

呉葉 …まあ、いいさ。ここは鬼の都だ。楽しくやりな。

トラ 姐さん…。

呉葉 でも…あたしは遠慮しとくよ。

刀に手をかけ、覚悟を決めた表情で去っていく呉葉。

トラ 姐さん…。ちょっと待ってください、姐さん！

虎蔵、呉葉を追って行く。

S9 大江山・集落の外れ

伊吹と弥三郎、駆け込んでくる。

大江山の集落の外れまで逃げてきた二人。

弥三郎 いやあ、危ないところだった。やっぱあれ、切れかかってるな。

そう言っつて、また一人大笑いする弥三郎。

伊吹、呉葉を気づかっつて、

伊吹 …お前、いいのかよ。

弥三郎 あん？

伊吹 話があるっつて言っつてたろ。

弥三郎、その言葉をスツとかわして、

弥三郎 いいんだよ。あいつとはもう、長え付き合いだ。言いたいことは分かってる。

伊吹 ……。

あいつもよ、ここを守ろうっつて必死なんだ。都に村を焼かれて、家族をなくして、ここにか居場所がねえからよ。そんなにがんばらなくなっつていいのにな。

そう言っつて、集落の方を眺める弥三郎。

伊吹、からかうように笑っつて、

伊吹 へえ。

弥三郎 …なんだよ。

伊吹 やっぱお前、いい奴だな。
弥三郎 やめる。恋する男と女に、その言葉は禁句だ。
伊吹 (呆れて) なに言ってたんだ、今さら。
弥三郎 それにオレは、鬼だ。

その瞬間、伊吹は再び弥三郎の瞳の奥に、ぬぐいきれない哀しみを見る。

……。

もう寝る。明日は、満月だ。

弥三郎、去ろうとする。

伊吹 弥三郎…。

伊吹、一瞬ためらいながらも、弥三郎に問いかける。

お前、なんで都を出たんだ。

あん？

伊吹 いいだろ、もう教えてくれたって。この山の中でお前だけなんだよ。ちゃんと笑ってねえのは。トラも、クマも、あの眞葉だって、時にはいい顔して笑ってる。…でもお前は違う。いったいなにがあった。

……。

教えるよ。

一時、見つめあう二人。

やがて弥三郎は、遠くを見やりながら、ぼつりぼつりとしやべり始める。

弥三郎 あの日…。オレが都を出たあの日…。オレはある村へ、鬼退治に向かっていた。
伊吹 鬼退治…？

弥三郎 その村で、オレは数え斬れんほどの鬼を斬った。村は焼け、鬼は死に、ようやく終わったと思っただけの時、炎につつまれた家の中から、一人の女がフラフラと歩き出てきた。女はな、その手に赤ん坊を抱いてたんだ。目もよく見えてねえみてえだよ、その赤ん坊を差し出しながら、オレの方に歩いてくるんだよ。オレはよ、刀持ってたんだぜ。今さっきまで、村の連中を斬ってた刀をよ。なのに女はオレに近づくと、オレにその子を託して息絶えた。その時な、その子が笑ってたんだ。

……。

伊吹 笑ってたんだよ。オレの腕の中で。家族を殺したオレの腕の中で、その子は幸せそうな顔をして笑ってたんだよ。なんでだ。なんであの子は鬼と呼ばれたんだ。なんであの子は生きてちやいけなかった。なんでオレは、あの子を殺したんだ。

弥三郎 それからオレは都を出た。鬼になった。その答えを探し続けた。でもな、やっぱり分からなかった。なにが人で、なにが鬼かなんて、オレにはどうしても分からねえ。でもな、これだけは言える。鬼を作ったのは、オレたちだ。そしてたぶん、お前を鬼にしたのもな。

伊吹は、それまでずっと感じてきた、弥三郎の心の壁の正体を知る。

弥三郎は伊吹の視線から逃れるように、背を向けて、

弥三郎 伊吹、この世で一番の罪を知ってるか。人が、人を斬ることじゃねえ。人を鬼にすることだ。

伊吹 弥三郎…。

伊吹が声をかけると、一瞬、逃げようとするかのように、体を震わせる弥三郎。

伊吹、ゆっくりと弥三郎に近づくと、寄り添うようにそっと抱きしめて、

伊吹 バカだな…。

弥三郎 ……。

伊吹 そのおかげでオレたち、出会えたんじゃないか。

伊吹は、言っただけでいい言葉は口にするかのようにゆっくりとしゃべっていく。それは自分の心に隠れていた思いを、一つ一つ確認する作業のようにも見える。

伊吹 きつとき、人間この世に生きて、無駄なことなんて何一つないんだ。どんなつらいことも哀しいことも、オレたちの犯してきた罪でさえ…。それは、決して償いきれるようなものじゃないかもしれないけど、でも、オレとお前が会えた、これは無意味なことなんかじゃない。だから…。

伊吹、弥三郎の手を取って、

伊吹 もし今、オレとお前がほんの一時でも手を取りあえたら、明日、オレたちがまだ生きていられたら、明後日、ひよっとしたら、だれかがオレたちに向かって、笑ってるかもしれないよ。

弥三郎 伊吹…。

伊吹 笑えよ、弥三郎。その子のように、無邪気に笑え。

伊吹、弥三郎をもう一度抱きしめる。

弥三郎 伊吹…。

されるがままになっていた弥三郎。やがてゆっくりと、しかし力強く伊吹を抱きしめる。

弥三郎 伊吹、オレは…！

伊吹 …弥三郎。お前、どこ触ってたんだ？

気がつくくと、手があらぬところを触っている弥三郎。

弥三郎

ああっ…いや、理性では分かっているんだけど、手が勝手に動いちゃうんだよな。

怒った顔でにらみつけていた伊吹、ふっと笑って、

伊吹

バカ。

弥三郎に抱きつく伊吹。

音楽

弥三郎も、今度は躊躇することなく、きちんと抱きしめる。
二人、しばらくそのまま、

伊吹 …弥三郎。

弥三郎 なんだ。

伊吹 オレ、都に戻るよ。

弥三郎 ……？

伊吹 兄様と話してみる。山も、都も、もう争わなくてすむように。互いが互いを…鬼になくていいように。

弥三郎 (心配そうに) お前、そんなことしたり…。

伊吹 大丈夫。兄様は、きっと分かってくれる。…オレを信じろって。

希望に満ちたその声に、やがて弥三郎も笑って、

弥三郎 …分かった。

伊吹 だから、それまでおとなしく待ってるよ。

笑いあう二人。

弥三郎 伊吹。気をつけろよ。

伊吹 ああ。

伊吹、行くこととする。

トラ・クマ 頭！

そこに、虎蔵と熊蔵が駆け込んでくる。

緊迫した表情で、荒い息をついている二人。

嫌な予感が弥三郎の中を走り抜ける。

弥三郎 なんだ、どうした。

トラ 姐さんが…。

弥三郎 呉葉が…。

顔を見合わせる伊吹と弥三郎。

ト
二 人
姐さんが、たった一人で都へ斬り込みました！
なに！

全員、都へ向かい、駆け出していく。

S 1 0 都のはずれ

都のはずれで、一人侍たちと戦っている呉葉。
その前に、保昌が姿を現す。

保 昌 この都にたった一人で乗り込んでくるとは…。血迷ったか、鬼！

保昌、呉葉に斬りかかっていく。
それに応じながら、

呉 葉 何も迷っちゃいないさ。これは戦だよ。
保 昌 なに？

呉 葉 戦だよ。あたしら人と、あんたら鬼のね。

呉葉、侍たちを斬り捨てると、保昌をにらみつける。
保昌、あざけるように呉羽を見て、

保 昌 我らを鬼と呼ぶか。

呉 葉 勝った方が人になり、敗けた方が鬼になる。そういうもんだろ、世の中ってのは。
保 昌 ならば、やはり貴様が鬼だ。

激しく戦う二人。

そこに、伊吹たちが駆けつけてくる。

伊吹・弥三郎 呉葉！

保 昌 貴様ら…！

弥三郎たちと共にいる伊吹を、憎々しげににらみつける保昌。

呉 葉 なんだい、お前たち！邪魔するんじゃないよ！

ト ラ 落ち着いてください、姐さん！

呉 葉 離せ！（弥三郎に）言っただろ。あたしは都を許さないってね。

弥三郎 呉葉！

保昌に斬りかかる呉葉。

しかし力負けし、倒れたところを伊吹がかばう。

保昌、伊吹をにらみつけ、

保 昌 貴様、裏切ったか。

伊吹 保昌様。
保昌 やはり、鬼は鬼か。
伊吹 待ってくれ。話を聞いてくれないか。
保昌 話だど？ふざけるな！さっさとそこをどけ！
伊吹 兄様は…兄様はどこに？
保昌 どうかねば…貴様も斬る！

保昌が伊吹に斬りかかろうとした時、信綱が出てくる。

信綱 待て、保昌！
保昌 信綱様…。

信綱の後ろには、刀を持った与平次の姿。
伊吹の変化に戸惑いながらも、山賊たちを警戒している。

信綱 保昌、下がれ。…下がれ！
保昌 ……。

保昌、悔しげに刀を引く。
だが呉葉たちとの間には、ピリピリとした空気が流れている。
互いに、ちょっとしたでも動けば斬るといように刀を構え、警戒しあっている。
伊吹、それを感じながらも、

伊吹 兄様…。
信綱 何をしている、伊吹。
伊吹 ……。
信綱 何をしている。なぜ鬼を斬らん。
伊吹 兄様。

信綱は、弥三郎たちの姿を見ようとせず、がむしゃらに言葉を続けていく。

信綱 そやつらは鬼だ。都に仇なす敵だ。鬼を斬らねば、また都の罪なき者たちが傷つくことになる。すぐに鬼を斬れ！

信綱の言葉に誘発され、保昌、呉葉、再び斬り合おうとする。

伊吹、それを止めて、
待ってくれ、兄様。…呉葉も。

伊吹、自分の思いを伝えようと、刀を地面に置く。
驚く一同。
ただ一人、弥三郎だけはそれを黙って見つめている。
伊吹はその弥三郎の思いに支えられるように、まっすぐに信綱を見て、

伊吹 …オレはもう、だれも斬りません。
信綱 なに。
伊吹 斬りたくないんだ。だれかがだれかを傷つければ、そこに鬼が生まれる。それじゃあいつまでたつても変わらない。…だからオレはもう、だれも斬りたくないんだ。

だが信綱は、その伊吹の思いを強い語調で切り捨てる。

信綱 バカなことを言っな！
伊吹 兄様…。

信綱 伊吹、自分が何を言っているのか、分かっているのか。お前が人となるまであと一人、あと一人だ。酒呑童子の首さえ取れば、すべて終わる。この都は幸せな国となる。
伊吹 幸せな国…？

信綱 そうだ。オレとお前は、そのために戦ってきたのではないか。それを…。

伊吹に詰め寄ろうとする信綱。

その時、伊吹の心を支えるように立っている弥三郎と目が合ってしまう。
心通わせる二人の姿に、己の嘘を突きつけられたようで何も言えず、視線をそらす信綱。

信綱 …お前が情に流されたばかりに、見ろ、今また争いが起ころうとしているのが分からんか。
伊吹 鬼は、退治されなくてはならんのだ。

信綱 …それでは、この人たちはどうなるんです。
伊吹 なに。

伊吹 この都が幸せな国になり、それで山のみんなはどうなるんです。
信綱 そやつらは鬼だ。鬼のことなど関係ない。

伊吹 いえ、人です。

信綱 伊吹。
伊吹 人です。

信綱 奴らは鬼だ。

伊吹 人だったんです。オレは、ずっと人を斬ってきたんです。

その言葉は、信綱の心にも突き刺さる。

伊吹 本当はずっと苦しかったんだ。鬼を、鬼と呼ばれる人たちを斬りながら、本当はずっと痛くて、苦しくて…そして鬼を斬るたび、どんどん本当の鬼になっていく気がして…。でも、兄様もそうじゃないんですか。
信綱 なに。

伊吹 だって今の兄様は笑ってない。都にいても、全然楽しそうじゃない。幸せな国をつくるためって兄様は言うけど、兄様はちっとも幸せそうじゃない。寂しかったんだよ、オレ、兄様がどんどん変わっていくみたいでさ。そこまでして、なんで戦わなきゃいけないんだ。なんで鬼退治が必要なんだよ。

伊吹に詰め寄られ、信綱は思わず、

信綱 お前のためだ！

伊吹

……！

信綱、哀しく伊吹を見つめながら、

信綱

全てはお前のためだ。オレはお前に出会い、知ったんだ。この都は、鬼を踏みつけ、生まれたものなのだ。いいか、伊吹。だれもが幸せに生きる世などありはしない。だからこそ、鬼退治が必要なのだ。お前が人であるために。

伊吹

…オレが人であるため…そのために、オレは鬼退治をしてきたのか。

信綱

人は皆そうやって生きている。何も変わらん。鬼がこの世から消えない限り。どちらかがこの世から消えない限り。

伊吹

……。もう、終わらせなくてはならんのだ。

信綱

信綱、去りかける。

何か言おうとして、言葉が出てこない伊吹。

その時、伊吹の後ろから、弥三郎がゆっくりと口を開く。

弥三郎

…偉いなあ、おめえは。

信綱

なに。

弥三郎

そうやって心を鬼にして働いて、つらい事、苦しい事を全部飲み込んでよ。だけどよ、お前、都のために必死になり過ぎて、大事なもんを忘れてねえか。本当に守りたかったもんを忘れてねえか。

信綱

守りたかったもの？

弥三郎

オレは思うんだ。この世に生きてちやいけねえ人間なんていねえ。死ななきやいけねえ鬼なんていねえ。鬼退治なんてもんが、まかり通っていいはずがねえんだって！

信綱、こらえてきた思いを吐き出すように、

信綱

だったらどうすれば良かったというんだ。どうすれば伊吹を守ってやれた。都中から鬼と呼ばれ、恨まれながら生きてきた伊吹を、どうすれば幸せにしてやれた。

弥三郎

だったらこいつは今、幸せなのか。本当に笑ってんのか。てめえの目、しっかり見開いて、よく見てみる。

弥三郎の言葉に、信綱、伊吹を見つめる。

そこには、哀しい瞳で信綱を見ている、伊吹の姿。

これまでずっと、目をそらし続けてきたものを目の当たりにして、信綱は言葉を続ける。「とがでない。」

伊吹もまた、信綱を見つめて、

伊吹

私はこのまま人と成っても、幸せにはなれません。

信綱

……！

伊吹

幸せにはなれません。

信綱

伊吹…。

その時、別のところから怒りに満ちた声が響いてくる。

与平次　ちくしょう、ちくしょう…ちくしょう！

与平次、刀を振り上げると、伊吹に斬りかかる。

突然のことに、驚き、慌てる一同。

与平次は刀を伊吹に突きつけながら、

与平次　今さらなに勝手なこと言ってるんだよ。だったらオレはなんなんだ！あと一息だったのに。

これが最後の鬼退治だと…オレはあんたと、人になれると思ってたのに…！

伊吹　待て、与平！

与平次　ちくしょう！

再び斬りかかる与平次。

その時、虎蔵が伊吹をかばって飛び込んでくる。

腹を刺される虎蔵。

伊吹　トラ！

与平次　……！

信じられないという目で、虎蔵を見る与平次。

慌てて刀を抜くと、虎蔵、倒れていく。

みんな

トラ！

虎蔵に駆け寄る伊吹たち。

弥三郎、思わず刀に手をかけて、

弥三郎

貴様！

与平次　オレのせいじゃねえ。オレのせいじゃ…。そいつが勝手に…。

まだ、何事が起こったのか、理解しきれていない与平次。

伊吹　…与平！

与平次　うるせえ！

伊吹　与平！

与平次　あんたが悪いんだ！あんたが素直に都に従ってくれてりゃ…オレだってこんなこと…！あんたが悪いんだ。あんたが悪いんだ！

与平次、卑屈な目で、周りにいる全員をにらみつけながら、

与平次

なんでだよ。なんでみんな邪魔するんだよ。オレはよ、みんなが幸せになんかならなかつた方がいいんだ。ただ、オレが幸せになりたかつたんだ！オレが、今、幸せになりたかつたんだ！それじゃいけないのか。それが悪いことか。やっとなになれると思つたのに。やっ

と抜け出せると思ったのに……！

再び刀を振り上げる与平次。

伊吹
与平！

ト ラ やめてください！

伊吹たちが刀に手をやりかけた瞬間、虎蔵が与平次の前に割って入る。

伊吹
ト ラ ……！

やめてください。伊吹さんも…みんなも…。

虎蔵、与平次を見て、苦しそうに、

ト ラ 分かるよ…兄者。

……！

他のだれにも分かってもらえなくても、オレだけは分かっている。兄者は、オレの大事な家族だもんな。

与平次
ト ラ ……！

与平、お前…。

いつも言ってたもんな。いつかこんな村抜け出して、あの都で暮らすんだって。兄者は、夢を叶えたんだよな。

与平次
ト ラ ……！

オレはよ、いっしょにはいられなかったけど、でもそれが兄者の幸せなら、オレはそれでいい。だから……！

ふらつきながらも、与平次に近づこうとする虎蔵。

だがその虎蔵に向かって、与平次は刀を突きつけ続ける。

自分の思いが伝わらない哀しさにうつむきながらも、虎蔵は弥三郎たちに向かって頭を下げる。

ト ラ お願いです。兄者には、手を出さないでください。お願いします。お願いします！

伊吹
ト ラ ……！

お願いします！

どうすることもできず、刀を持つ手を下ろしていく弥三郎たち。

虎蔵、顔を上げると、信綱に向かって、

ト ラ なあ、都の…。あんた言ったな。酒呑童子の首をとれば、この戦は終わるって。

信綱
ト ラ ……！

……！

……！

オレが大江山の鬼の頭、酒呑童子だ。この首一つで戦が終わるというのなら、オレの首をとれ。

弥三郎
ト ラ ……！

弥三郎 トラ、待て！

黙っててください！……文句はないな。

……本気が。

ああ。

信綱 お前はただ死ぬだけではないぞ。この都を脅かした最後の鬼として、お前の魂は未来永劫人々の恐れと憎しみを背負うことになる。それも……覚悟の上か。

そうすれば、伊吹さんは人になれるな。兄者は……与平次は、都で幸せに暮らせるな。

信綱、虎蔵がすでに長くないことを悟り、唇を噛みしめながらもつなずく。

信綱 約束しよう。

なら……斬れ！

弥三郎 トラ！

虎蔵、笑って弥三郎を振り返る。

トラ 頭。すいません。勝手なことをして。

……。

トラ オレ、幸せでした。オレの人生、ろくなことがありませんでしたが、頭と出会って、山で過ごした一時、オレ、ホントに楽しかったんです。だから……すいません。

虎蔵、今度は呉羽を見て、

トラ 姐さん、兄者のこと、恨まないでください。これはオレが望んだことですから美人の姐さんには、恨みつらみは似合いません。いつもみたいに、威勢よく笑ってください。

クマ トラ……。

虎蔵、何か言おうとするが、すでに意識も薄れ始め、言葉が続かない。

最後に、絞り出すように、

トラ ……ごめんな。

虎蔵、最後の力を振り絞り絞って伊吹の刀を取ると、抜いて伊吹に差し出す。

トラ 伊吹さん。

……。

斬ってください。

トラ。

オレは鬼です。オレを斬って、人になってください。

トラ、オレは……！

諦めちゃダメですよ。人間、どこにいたって、どんなときだって幸せになれるんです。その方法を、見つけてあげればいいだけなんです。

虎蔵、大江山で過ごした日々を思い出しながら、

トラ
でも人間って欲張りなもんですね。一つ幸せになると、もっと幸せになりたくなる。もっと幸せになると、もっともっと幸せになりたくなる。もっと…生きていたくなる。

苦しそうにあえぎ、倒れそうになる虎蔵。
伊吹、もうこれ以上苦しませることはできないと思い、弥三郎を見ると、弥三郎も小さくうなずく。

トラ
…でもね、これ以上夢見ちゃうと、きつと兄者のこと、嫌いになっちゃうと思うんですよ。また恨まなきやいけなくなっちゃうと思うんですよ。もうそんなのは嫌だから…だからこの辺が、ちょうど良かったのかもしれないな。
トラ、オレは…。

（遮って）兄者、絶対幸せになってくれよな。そしてもしいつかオレが生まれ変わって、もう一度出会えたら、その時は都も山も、人も鬼もない、そんな世の中になるといいな。

与平次
トラ…ごめんな、オレは…ごめんな…！

虎蔵、泣いている与平次を見て優しく笑うと、刀を伊吹に差し出す。

トラ
さあ、伊吹さん。

伊吹、刀を受け取ると、虎蔵に向けて構える。
虎蔵、姿勢を正して、

トラ
オレ、あんと会えて、幸せでした。
伊吹
オレも…幸せだったよ。

伊吹、虎蔵を斬る。

与平次
トラ！

倒れた虎蔵に駆け寄り、泣き崩れる与平次。
伊吹、刀を握りしめながら、

伊吹
これが…平和ですか。
信綱
……。
伊吹
これが幸せですか。ここまでしてもなお、手にしなくてはならない平和とは、いったいなんですか。

突然、保昌がこれまでとは違って変わってかしくまり、伊吹に向かって頭を下げる。

保昌
伊吹様。これまでの長のお役目、ご苦労様でした。帝が御所にてお待ちでございます。急ぎご支度の上、拝謁賜りますようお願いいたします。
伊吹
帝…！

保昌

伊吹様がこれまで果たされ師数々の武功、帝の覚えめでたく、従三位、近衛大将の叙勲を承っております。これよりは参議となりて、よりいっその都の発展に力を尽くされますよう、お願いいたします。

伊吹

近衛大将…鬼のオレが…。

保昌

いえ、人にございます。都の民もみな、伊吹様のお帰りをお待ちしております。何卒お急ぎください。

伊吹、怒りに満ちた目で保昌をにらみつけ、詰め寄ろうとする。

伊吹

ふざけるな！

信綱

伊吹！

その伊吹を必死に止める信綱。

だが保昌は、そんなことなどまるで意に介さぬかのように姿勢を崩さない。

伊吹

トラが死んだんだぞ。

保昌

ただの鬼にございます。

伊吹

トラが死んだんだ！それなのに…！

信綱

やめろ！

信綱、伊吹を必死に押さえる。

信綱

もうやめてくれ！頼むから…！

伊吹

兄様…。

信綱、苦渋に満ちた目で伊吹を見て、

信綱

分からんか、伊吹。カガチのお前が都に逆らえばそのときは…！

麻呂、出てくる。

また戦の世となろう。

麻呂

……！

同時に、都の侍たちが駆け込んできて、弥三郎たちに刀を突きつける。

麻呂

伊吹。そなたがあくまで都に逆らうというのなら、その時は、再び鬼と呼ばれることになるぞ。そなたも、この者たちもな。

伊吹

なに。

麻呂

言ったであろう。都はお前を逃しはせん。カガチのお前を人とし、都に迎える。その時初めて都は真の豊かさを手にするのだ。

……。

なめに、大したことはあるまい。ただ忘れればいいだけのことよ。

伊吹

忘れる？

麻呂 この者たちのことを、共に過ごした日々を、そしてこの悲劇を。

麻呂、都を見渡して、

麻呂 見ろ、この国を。このような哀しみがあつたことなど、だれも知らん。人は知つてしまつから、恨みを持つ。だから忘れるんだ。それで全て丸く収まる。悩むことでもあるまい。この者たちを忘れ、都で幸せに暮らしていくか、この者たちと鬼になり、永遠の戦の中に身を投じるか。さて、どうする。

信綱 伊吹…頼む…！

伊吹、客席を見渡して、

伊吹 いったいオレたちは、どれほどの哀しみを忘れて生きているのでしょうか。平和なこの国を築き上げる、そのために、どれほどの鬼を退治し、その思いを踏みつぶして生きているのでしょうか。

伊吹、麻呂の元へと向かつていく。

弥三郎 伊吹…。

伊吹 …もう忘れよう。なにもかも。オレたちは出会わなかった。ただ一時、夢を見ただけだ。

弥三郎 ……。

伊吹 そして幸せになるんだ。オレは都で、お前は山で…。

弥三郎 伊吹！

伊吹、最後にもう一度振り返ると、涙に濡れた瞳で、

伊吹 …ごめんな。

伊吹、思いを振り切るように、足早に去って行く。

保昌

伊吹様のお戻りである。都に住まう民草よ、平伏して出迎えよ。たった今よりこのお方は、鬼を捨て、人と成られたのだ。

伊吹を先頭に、去って行く都人たち。

またこの間に、虎蔵の遺体も舞台から片づけられる。

信綱、去り際に弥三郎を振り返り、

信綱 …いずれ、このけじめはつける。

何かを決意した面持ちで、去っていく信綱。

S 1 1 都のはずれ・一時の後

都人が去り、取り残された、弥三郎と呉葉、熊蔵。
ただ哀しみと、絶望感だけが漂っている。
伊吹の去った方を、ぼんやりと眺めている弥三郎。
その先には、変わらぬ都の姿。

呉葉 あんた…。

弥三郎、わざと明るい口調で、

弥三郎 あかんかった…。

呉葉 ……。

あかんかったわ。人間、バカな夢を見るもんじゃねえな。ちょっとだけよ、思っちゃったんだ。ひよっとしたら、オしも幸せになれるんじゃねえかって。もう刀を振るうこともねえ。気の合う仲間とバカやって、惚れた女といっしょになって、ずっと幸せに暮らしてくんじゃねえかって…。行こうか。
どこにさ。

呉葉

去りかけた弥三郎、呉葉をにらみつけると、今度は激しい口調で、

弥三郎 山に帰るんだよ！言われたろ。全部忘れろって。

呉葉 ……。

トラの言った通りだ。人間幸せになると、もっと幸せになりたくなる。そうなりや、あいつを恨まなきやいけなくなる。そしたら今度はだれが死ぬ。お前か、それともオレか？
…。

弥三郎

やめようや。もう十分だ。なんもかんも、全部忘れて、のんびり生きてくさ。行くぞ。

弥三郎、去ろうとする。
だが、呉葉は動かない。

クマ

姐さん…。

呉葉、ぼつりとつぶやくように口を開く。

呉葉 ……あたしは忘れないよ。

弥三郎 呉葉。

忘れられるわけじゃないか。これまでいったい、どれだけ苦しい思いしてきたと思うんだい。それを、全部なかったことにしろって？冗談じゃないよ。
もうやめろ！

弥三郎

あたしは嫌だね！あたしは絶対忘れない。村を追われた日のことも、あんたと出会って、山で過ごした日々も、トラが死んだことも…！

呉葉

次第にエスカレートする思いを吐き出すように、呉葉はしゃべり続ける。
涙に濡れた顔をキッと上げ、弥三郎を見る。
しかしそこにはもう恨みの色はない。

だつてあたしは、生きてた。

……！

あたしは生きてきたんだ。苦しいこと、哀しいこともあったけど、それでもあたしは生きてきたんだ。それをなかつたことになんかできないよ。それじゃあ、あたしはいつたいなんのために生まれてきたんだい。なんのために鬼になつたんだい。なんのためにあんなに……惚れたんだい。

……。

トラだつてそうさ。あいつは生きてた。あいつは生きて、必死に戦つて、そして死んだんだ。それを全部忘れて、なかつたことにしろつて？ふざけるんじゃないよ！人はね、人がこの世に生まれ、必死に生きたそのことだけは、なにがあつても忘れちゃいけないんだ。だから……。

呉葉、弥三郎を見ると、優しい笑顔で笑いかける。

行きな。

……！

本気か、と言うように、呉葉を見る弥三郎。

いま都に逆らうということは、みんなの死を意味する。

だが、それでも呉葉は笑つて、

人と鬼が、どうやったら手を取り合えるのか。そんなことはあたしには分からない。でも

もし、あんたと伊吹が結ばれるなら、ひよつとしたら、ほんの少しでも、何かが変わるか

もしれないよ。

また……鬼になるぞ。

分かつてるさ。

今度こそ、戦になるぞ。

たとえ今は戦でも、いずれ変わるさ。……千年の未来にはね。

そう語る呉葉の笑顔は、だれよりも美しい。

どうするんだい。頭はあんただ。あんたの命令に従うよ。

(笑つて) 頭！

……それとも、やっぱりあたしとつましく暮らす方がいいかい？

弥三郎、嫌そうな顔で呉葉を見ると、いつもの調子で、

んゝ不合格。

このバカちん！

呉葉、弥三郎を殴る。

……お前くらいで満足するのも、悪くないって思つてたんだがな。

呉葉
惚れた女も取り返せないような、そんなやわな男はごめんだね。
弥三郎
言ってくれんじゃねえか！

弥三郎が刀を抜くと同時に、都の侍たちが入ってくる。
その先頭には、抜き身の刀を下げた保昌の姿。

弥三郎
…死ぬんじゃねえぞ。
呉葉
さっさと行きな！

弥三郎、都へ向かい、駆け出していく。
侍たちは、じりじりと呉葉と熊蔵に迫ってくる。
二人、それを見渡しながら、

呉葉
…ったく、うちの男どもときたら、どうしてこう手がかかるのかね。

クマ
そりゃあ、姐さんが優しいからじゃないっすか。

呉葉
なんだい、惚れたかい？

クマ
残念、不合格。

呉葉
あんたもかい！

保昌
やれ！

侍たち、一斉に襲いかかってくる。

二人、必死に応戦しながらも、笑顔が消えることはない。

クマ

姐さん、もし都和山と一緒に生きていたら、きっと楽しいこと、もっといっぱいあるんでしょね。だって山のみんなだけでも、けっこう楽しくやれたんですから、人がたくさん増えたら、その分楽しいこともたくさん増えると思うんですよ。だからそんなときや、またみんなで会いましょうや。

熊蔵、保昌に斬られ、絶命する。

呉葉

クマ！

侍たちに取り囲まれる呉葉。

呉葉

分かってるね、弥三郎。惚れた女は死んでも守るのが、男ってもんだ。

刀は折れ、追いつめられていく呉葉だが、どれほど傷を負っても堂々と立つその姿は、今までで一番女らしい。

呉葉
二度とあの子の手、離すんじゃないよ！
保昌
殺せ！

侍たちに斬られ、絶命する呉葉。

保昌 殺せ、殺せ！鬼も、鬼に連なるもの共も全て、皆殺しにしろ！

保昌、武士たちを連れ、駆け出していく。

S 1 2 都・市中 1

一方で、都へと乗り込んでいく弥三郎。
幾人もの侍たちに囲まれながら飛び込んでくる。

弥三郎 ときやがれ！今日はこの弥三郎様、ちっとばかりキレてんだ。痛い目見たくなきゃ、さつさと道をあける！

侍たちと戦う弥三郎。

しかし次から次へと現れる侍たちに邪魔され、思うようには進めない。
そこに、刀を持った与平次が駆け込んでくる。

弥三郎をかばうように立つ与平次。

弥三郎 おめえ…！

与平次 行ってください！伊吹様は今、御所へ。どうぞお早く！

刀を振り回し、侍たちをけん制する与平次。

弥三郎 いいのかよ。せつかくトラがくれた命だろうが。

与平次 あいつは幸せになれていったんです。あいつを忘れて、幸せになんかなれますか！

弥三郎 よっしゃ…！

弥三郎、目の前の侍を斬り捨てると、都の奥を目指して駆け出していく。
後を追おうとする侍たちの前に立ちはだかり、刀を構える与平次。

与平次 伊吹様のこと、頼みましたよ。二人に幸せになってもらわなきゃ、オレはトラに合わせる顔がねえですから。

瞬間、目を合わせてうなずきあう二人。

弥三郎、走り去る。

与平次、不器用に刀を振り回しながら、必死に侍たちを斬っていく。

与平次 トラ、トラ…！

最後には、自分の体を盾にするようにして、侍たちの行く手を阻む与平次。

与平次 トラ！

与平次、死んで行く。

都の御所の近く。

同じく侍たちに囲まれて、戦っている信綱。

駆け込んできた弥三郎を見て、驚いたようにその手を止める。

信綱 バカやろう……何をしに来た！

そっついうおめえこそ、なにやってんだ。

……。

弥三郎 一人で御所に斬り込む気だったか。

信綱 オレは……！

侍たちに囲まれ、背中合わせに立つ二人。

それはかつての二人がそうであったであろう光景。

弥三郎、笑顔で刀を構えながら、

弥三郎 まったく、昔からお前は生まじめ過ぎていけねえや。

信綱 ……すまん。

弥三郎 気にすんなって。友だちだろうが。

息の合った戦いを見せる二人。

そこに、保昌が駆け込んでくる。

保昌は一段と激しい怒りの表情で信綱をにらみつけると、刀を突きつける。

保昌 信綱！貴様、いったい何の真似だ。都を裏切るつもりか。

信綱 オレはただ、けじめをつけただけだ。

保昌 愚か者が……！

信綱に斬りかかっていく保昌。

手だれの保昌と、他の侍たちに囲まれ、次第に追いつめられていく信綱。

弥三郎も戦いながら、信綱を振り返り、

弥三郎 ツナポン！

ツナポンって呼ぶな！

信綱 今さら貴様らがどうあがいた所で、都の繁栄は揺らぎはせんということが、なぜ分からん。分かってるさ。

保昌 ではなぜ戦つ。

信綱 んなこと知るかよ！ただそっつしなきやいけねえ気がするだけよ。

保昌 ならば貴様も鬼だ！

保昌、荒々しく信綱に斬りかかっていく。

傷を負いながらも、ついに保昌を刀で刺し貫く信綱。

弥三郎 ツナポン！

信綱 行け！サブちゃん！

信綱は刀を抜くと、よろめきながらも弥三郎をかばうように立ちはだかる。

信綱 伊吹を助けてやってくれ。あいつには…お前が必要だ。

弥三郎 ツナポン…。

オシはよ、今日のこの日を夢見て生きてきたんだぜ。あいつが人になるこの日をよ。それなのに、なんでその日になってよ、お前にかっさらわれなきゃなんねえんだ…！

信綱、侍たちに立ち向かっていくが、その姿はすでに死を予感させる。

信綱 幸せにしてやってくれよな。でなきゃ、好きで好きで好きで好きでしようがねえ女のため、

今日まで手のひとも握らんと、必死に生きてきたオシがどうにもやるせねえからよ。

ツナポン…すまん。オシ、一回だけやっちゃった。

なに！

あ、やっぱウソ。やっぱウソだからな。

さっさと行け！

その時、弥三郎はふっとまじめな顔で信綱を見るが、何も言わずに走り去る。その後ろ姿を追いながら、今までで一番幸せそうに笑う信綱。

信綱 …ホントにさねえ人生だ。

侍たちがじわじわと信綱を取り囲んでいく。

保昌も、虫の息ながらも立ち上がり、刀を構える。

信綱、それをにらみつけ、

信綱 さあ、かかって来やがれ。オシはあいつみてえな甘ちゃんじゃねえからよ。ここを通らんとする者は、一人残らずたたっ斬る。源氏の侍大将、源信綱、そう簡単にやられはせんぞ。

保昌 鬼を殺せ！

一斉に襲いかかってくる侍たち。

信綱は次々に傷を負いながらも、侍たちを斬っていく。

それはこれまでの鬱憤をすべて晴らすかのような、激しい戦いである。

やがて、侍たちをすべて斬り捨てる信綱。

静まり返った都の往来で、ぼつりとつぶやく。

信綱 鬼になるってのも、なかなか悪くねえ。

信綱、絶命し、倒れていく。

麻呂、出てくる。

ゆっくりと信綱に近寄ると、冷たい目で見下ろし、蹴りつける。

麻呂 鬼は、鬼よ。

舞台は、都の御所へと変わる。

S14 都・御所

都の御所。

市中の喧騒など何一つ届かず、静けさに満ちている。

それはまるで、先ほどまでに争いなど何一つなかった、と言っているかのようである。

重い足取りで、刀を持った伊吹が出てくる。

麻呂は眼下に広がる都を見渡して満足げに、

麻呂 伊吹、これが日本だ。豊かであらんとする、全ての民草の意思だ。

……。

麻呂 分かっていような。そなたがどこへ行くことも、都は追い続ける。そなたが心通わせし者、全て鬼となる。人と成れ、伊吹。これ以上、鬼を作らぬためにも、弥三郎を斬れ。

麻呂、去っていく。

一人たたずんでいる伊吹のもとに、弥三郎がやってくる。

弥三郎はいつもと変わらぬ調子で、明るく声をかける。

弥三郎 よう。

伊吹 ……。

弥三郎 どうした。暗いじゃねえか。せつかく愛しい男が迎えにきてやったんだ。さっさと胸に飛び込んでくるのが、女の礼儀ってもんだぜ。そんでもって、あつーいくちづけを…。

伊吹、それとは対照的に、冷たい声で、

伊吹 なんて来た。

弥三郎 ……。

伊吹 なんて来たんだよ。

弥三郎 オレがいねえと、寂しいんじゃないかと思つてよ。

伊吹 バカやろう…。

弥三郎 …言葉もねえ。

伊吹 お前が来るから、オレはお前を斬らなきゃいけないなくなつちまったじゃねえか。

冷静を装いながらも、伊吹の目からは今にも涙がこぼれそつである。

それを必死にせき止めているのは、逃れきれない自身の運命を受け入れたからなのか、あきらめたからなのか、それは読み取ることができない。

しかし心を殺して、どこか達観した思いを抱いていることは感じてさせる。

伊吹、弥三郎を哀しく見て、

伊吹　　なんでオレはお前と出会っちゃったんだろうな。お前と会わなきゃ、オレはお前を鬼として斬ることができたのに。

……。

伊吹　　もうだれも、傷つけたくなかった。もうだれにも、傷ついて欲しくなかった。もうだれも鬼にしたくなかった。お前に生きていて欲しかった。たとえ共に暮らせなくても、どこかに生きている。幸せに暮らしている。それだけでオレには十分だったんだ。大好きなお前を…失うくらいなら…。

弥三郎　　伊吹。

伊吹　　来るな！

伊吹、刀を構える。

伊吹　　来れば斬るぞ。オレはもう、都で幸せになるって決めたんだ。

瞬間、弥三郎は伊吹を見つめる。

伊吹の瞳に宿る哀しみは、おそろくは以前、伊吹が弥三郎の瞳に見たものと同じである。

弥三郎、優しく笑って、

弥三郎　　だったらお前は、なんで泣いてんだ。

伊吹　　……。

泣いてんじゃねえか。これから幸せになろうって女がよ。なんでそんな悲しそうな顔して泣いてんだ。お前がオレを斬って、それで本当に幸せになれるって言うんなら、オレは何度だって死んでやる。でもな、お前本当にそれでいいのか。それがお前の望んだ幸せか？

答えに窮する伊吹。

弥三郎　　どうすんだ。オレはもう鬼の名乗りを上げちゃったからよ、退くわけにはいかねえぞ。お前がオレを斬るか、オレといっしょになるか。二つに一つだ。お前が選ばねえなら、オレはお前の首根っこ、ひつつかまえてでも連れてくぞ。

暗がりの中、麻呂が侍を引き連れて現れる。

伊吹の思いをけん制するように、静かに、冷たく見つめている麻呂。

伊吹、それを心で感じながら、

伊吹　　…オレがお前の所へいったら、また戦になるんだぞ。

弥三郎　　そうだろうな。

伊吹　　またたくさんの人が鬼と呼ばれ、苦しむことになるんだぞ。

弥三郎　　そうだろうな。

伊吹　　だったらそんなこと…！

弥三郎　　んなこと、関係あるか。

弥三郎、刀を抜く。

弥三郎　　それでも、オレはお前に惚れてんだ！

音楽「心を開いて（ZARD）」

斬りかかってきた侍たちを、瞬時に斬り伏せる弥三郎。

弥三郎
オレはお前に惚れてんだ。どっかで生きてりや十分だと。ふざけんじゃねえや。悪いがオレは欲張りだからよ。惚れた女は、この腕で思いっきり抱きしめてやんなきゃ、満足できねえんだよ。

麻呂
鬼を殺せ！

麻呂の号令とともに無数の侍たちが現れ、弥三郎を取り囲む。
弥三郎はそれに臆することなく、刀を構え、

弥三郎
惚れたもん同士がいつしよになれねえ世の中の、いったいなにが幸せだ。そりゃあ、オレたちがいつしよになったらよ、苦しいことや哀しいことが、いっぱいあるかもしれねえよ。そのせいで、だれかが傷ついていくのかもしれないよ。だけどオレは、絶対お前を離さねえ。たとえこの先、なにがあるとも、オレはお前の側にいる。でなきゃ、オレたちのためにと死んでったトラが、呉葉が、与平が、ツナポンが…あんまり哀れでしょうがねえかよ。

襲い来る侍たちを、次々に斬っていく弥三郎。

伊吹はどうすることもできず、ただ弥三郎の戦いを見つめていることしかできない。

伊吹の傍らには、麻呂が楔のように座し、伊吹を冷たく見つめている。

そんな伊吹に向かい、弥三郎は明るく笑ってみせる。

弥三郎
訂正するわ。オレがいないとお前が寂しいんじゃねえ。お前がいねえと、オレが寂しくて寂しくしょうがねえんだよ。

侍たちの攻撃の手は緩むことがない。

弥三郎は思いの丈を叩きつけるように、刀を振るい続ける。

弥三郎
伊吹、一っだけ教えてくれ。すべての鬼を退治して、鬼のいなくなったこの国は、本当に幸せな国なのか。恐れをなくしたこの国は、本当に幸せな国なのか。平和なこの国は、本当に幸せな国なのか。

弥三郎、客席に向かい、刀を突きつける。

弥三郎
今この国は、本当に幸せな国なのか。

以後、弥三郎は激しく戦いながら、伊吹に、麻呂に、そして客席に向かいしゃべり続ける。

弥三郎
オレは思うんだ。人が幸せであることを、当たり前と思うことほど哀しいことはねえんじやねえかって。つらいこと、哀しいことがあったっていいじゃねえか。苦しい日々があったっていいじゃねえか。そういうことがあって、そんなときに助け合って、励ましあって、

幸せっていうのはよ、そういうときに見つけるもんなんじゃねえのか。嫌なもんを嫌だ嫌だといってりゃ、そりゃあ人生つらいわな。だけどイヤなもの、嫌いなものを全部なくしちゃったら、人はどうやって人の痛みを知ればいい。傷つくことを知らない人間が、どうやって人に優しくすればいい。本当の豊かさって言うのはさ、人が、人の痛みを知ることなんじゃないのか。痛みに耐えるその力のことを、優しくさって言うんじゃねえのか。

だから伊吹、お前は人間だ。傷つき、苦しむことを知った人間だ。人間、この世に生きて、無意味なことなんて何一つないんだ。喜びも、悲しみも、幸せも、不幸せも、善も、悪も、人も、鬼も！全部認めて生きていくしかねえんだよ。

喜びも…哀しみも…。

ああ。

人も…鬼も…。

ああ、そうだ。

そんなの無理だよ。

運命の呪縛から逃れることができない伊吹。それに呼応するように、弥三郎は傷を負っていく。

刀は折れ、深手を負い、侍たちに取り囲まれた弥三郎、伊吹に向かって必死に手を差し伸べる。

伊吹、この手を取れ。人は人と触れ合って初めて人になれるんだ。苦しみを分け合って、支え合って初めて人になれるんだ。そのためにオレたちは出会ったんだ。そのためにこそ、オレはお前に惚れたんだ。

弥三郎、客席を激しくにらみつける。

それは怒りでもあり、一抹の希望へのすがる思いでもある。

今から千年、

今から千年…。

たとえこの都がどれほど広く、大きくならうとも、人と人が触れ合い、その手を握り合う距離は変わりはないだろう。今から千年、

今から千年…。

たとえ人がこの世界の果てまでもたどり着き、この世を支配したとしても、たとえ人がどれほどの力を手に入れ、どれほどの物がこの都にあふれていようとも、人と人が見つめ合い、抱き合える距離は変わりはないだろう。

弥三郎、ゆっくりと立ち上がっていく。

伊吹、お前は分かっているはずだ。こいつらが本当に殺そうとしているものがなんなのか。鬼とは畏れた。畏れることを忘れた人間は、敬う心も失うだろう。畏れを失くした人間は、愛する心も失うだろう。鬼を殺した人間は、神をも殺すだろう。神とは、良心のことなのだから。人が人を敬う、優しさのことなのだから。

……。

この手を取れ、伊吹。たとえこの先、どれほどの苦しみがおレたちを襲ったとしても、た

伊吹
弥三郎

弥三郎

伊吹
弥三郎

伊吹
弥三郎

弥三郎

弥三郎

伊吹
弥三郎

伊吹

弥三郎

伊吹

とえどれほどの哀しみに心引き裂かれたとしても、オレは絶対お前を離さねえ。だから伊吹、この手を取れ！

残る力で、必死に手を差し伸べる弥三郎。

それに答えて、手を差し出そうとする伊吹。

だがその横から、麻呂の冷たい声が響いてくる。

麻呂 バカなこととは考えるな。お前は鬼だ。その血の穢れから、お前は逃れることはない。

弥三郎 伊吹！

麻呂 人になるには、我らに従う他はない。弥三郎を斬れ。

弥三郎 この手を取れ！

麻呂 伊吹！

弥三郎 伊吹！

伊吹 ……弥三郎！

ついに弥三郎に向かい、手を差し出す伊吹。

麻呂 殺せ！

スローモーションで、駆け寄っていく二人。

それは冒頭のそれと全く同じ光景である。

その二人に、侍たちは次々に斬りかかって行く。

何度も斬られながらも、ついに伊吹の元にたどり着く弥三郎。

だが一人の刀が弥三郎の体を刺し貫く。

伊吹の腕の中に倒れこむ弥三郎。

伊吹 弥三郎！

弥三郎、伊吹の手を取って、

弥三郎 ……捕まえてやったぜ。

伊吹 お前…バカだよ。オレのことなんか放つときゃ、こんなこと…。

弥三郎 苦勞がでっけえ方が、幸せもでかいってもんよ。オレは今、最高に幸せだ。

弥三郎、伊吹に優しく口づけをする。

そのまま、伊吹にのしかかるように倒れていく。

伊吹、そのまま動こうとしない弥三郎に向かい、わざと明るくしゃべりかける。

伊吹 ……バカお前、どこ触ってんだよ、こんなときに。やめろって。いや、別にお前が嫌いってわけじゃねえけどよ、こっぴうのはムードってもんがあるだろ。ほら。

弥三郎、動かない。

伊吹 おい、どうした。シャキッとしろよ。一応オレも女なんだからさ、男にビシッとリードし

てもらわねえと、困っちゃうんだよ。なあ、弥三郎。おい…おいってば。お前…もう死んだのか…？なんだよ、お前、言ったじゃねえか。ずっとオシの側にいるって。オシを二度と離さないって。ずるいぞ、お前。人にさんざん気を持たせといてよ。なあ…目を開けろよ。もうオシを、一人にしないでくれよ。おい！

弥三郎を抱きしめながら、泣き続ける伊吹。

その時、弥三郎の手がかすかに動き、伊吹の髪をなでる。

弥三郎 一人じゃねえさ。お前はもう…一人じゃねえ。

弥三郎、ゆっくりと立ち上がり、

弥三郎 泣くんじゃねえよ。オシは。ピー。ピー泣いてる女は嫌いなんだ。

伊吹 弥三郎…。

弥三郎は少しずつ、伊吹から離れていく。

それは決して手を取りあうことのできない、二人の距離にも思える。

弥三郎 人はいつか気づくだろう。人を鬼にする愚かさを。共に生きる「こと」の豊かさを。だからその日まで…オシたちが本当に手を取り合えるその日まで、ちよっとの間のお別れだ。

侍たち、刀を構える。

弥三郎 伊吹！千年の未来で会おう！

伊吹 弥三郎！

侍たちの刀が、弥三郎の体を刺し貫く。

音楽「金色野原（手島葵）」

ゆっくりと倒れていく弥三郎を、抱きしめる伊吹。

それは冒頭の二人の姿そのままである。

侍たちは去り、やはり冒頭と同じく、二人の姿を遠くから見つめている麻呂。

音楽の中、千年の時が流れていく。

やがて麻呂は客席を見ると、ぼつりとつがややく。

麻呂 こうして、鬼が死んだ。

S 15 現代

再び、現代。

遠くから、パトカーのサイレンが聞こえてくる。

麻呂、それを聞きながら、ゆっくりと語り始める。

麻呂

あれから千年、二人の定めは変わらねえ。何度生まれ変わろうと、何度巡り合おうと、二人が手を取り合うことはねえ。鬼は、鬼だからな。人は一度手にした豊かさを、手放すこととは決していない。より大きな幸福を求め、繁栄を求め、敵を、邪魔なものを、不愉快なものを…鬼を退治し続ける。それでいい。人は、豊かにならねばならないのだから。だれかを鬼にしなくては生きていけないのだから。だから人々よ、鬼を作れ。そして殺せ。

麻呂、去ろうとする。

その時、伊吹がふと顔を上げる。

…ふざけんなよ。

……！

伊吹 麻呂

人が人を鬼にしなきゃ、生きていけないって？だったら…

伊吹、刀を手に、ゆっくりと立ち上がる。

伊吹

だったら、オレが鬼になってやる。オレが未来永劫、この国に住まう鬼になる。人の心に潜む畏れになる。

……。

伊吹 麻呂

人は豊かな国を手に入れて、なにを失った。耐えることを失った。人を思いやることを失った。罪の重さを失った。そして人は知ってしまった。人を傷つけることのたやすさを。傷つく前に、傷つけることの気楽さを。

……。

伊吹 麻呂

目に見えるものだけで国を築けば、そこに鬼は住めぬかも知れん。だがそこには神もない。忘れるな。この世に鬼はあるのだと。たとえこの身が滅ぼうとも、オレは永遠に人の心に在り続ける。

麻呂、静かに懐に隠していた刀を抜く。

伊吹 麻呂

それがお前の作ったこの国への、オレの戦だ。貴様……！

斬りかかってくる麻呂を、伊吹、斬り捨てる。

そしてそのまま、客席をにらみつけ、

伊吹

オレが鬼なら、お前はなんだ。

音楽「フレンズ（REBECCA）」

幕